

Pax et Dignitas: 平和に尊厳をもって (2012年4月16日版)

辻野 匠 (TuZino, Taqumi)

目次

1	はじめに	1	3.19	ダブルバインド	14
2	いくつかの原則	1	3.20	沈黙による攻撃	15
2.1	他人の気分を左右されない	2	3.21	「そんなんではやっていけない」攻撃	16
2.2	堂々とせよ	2	3.22	命令・依頼のトリック	16
2.3	怒ってはならぬ、しかし怒りを感じたのならそれを否定してはならぬ	2	3.23	最低条件を最高条件にすり替える 詐術、あるいはその逆	18
2.4	納得できないことに同意してはならぬ	3	3.24	いくつも理由を積みかける攻撃	18
2.5	なにが一番大事か？ 心の星を求めなさい	3	3.25	「みんな…」攻撃	19
2.6	無知は罪ではない、失敗は恥ではない	4	3.26	「はぐらかし」論法	19
2.7	完璧はありえない	4	3.27	「聞きながし」論法	20
2.8	自分の幸福に責任をもつ	4	3.28	「ほめごろし」攻撃	21
2.9	平凡でいい	4	4	外部機関の支援を頼る	21
2.10	ひきよせの法則	5	5	終わりに、勝利なき戦いを捨てること、そして警告	23
3	応答例文集	5	6	未整理分	24
3.1	トラウマとパニック	6		2007-09-28 起筆	
3.2	反論に際して第一に確認すべきこと	6	1	はじめに	
3.3	「世の中はそんなものではない」攻撃	6		生きていく上で心の平和 (pax cordis/inner peace) と尊厳 (dignitās/dignity) は、不可缺 (necessarius/essential) である。	
3.4	「そんなことは世界では通用しない」攻撃	7		人は、それらが缺けてみたり見失ったりした時に、面倒なことになったり、つらい思いをする。心の平和と尊厳を獲得するためには、人の心を深く理解する必要がある。	
3.5	冷笑屋の攻撃	7		ここでは心の平和と尊厳を妨害するものを、主に言葉と思考によって排除する応答例について取り上げる。	
3.6	「話にならん」攻撃	7	2	いくつかの原則	
3.7	暴言による攻撃	8		いくつかの各論的原則を述べる前にいちばん重要な原則を述べる。いちばん重要な原則とはリベラルであれ、といふことである。リベラルとはなにか？ その定義は次の引用から推測してほしい。	
3.8	「本當のことだから」攻撃	8			
3.9	「お前はわがままだ」攻撃	9			
3.10	「人に迷惑をかけていいのか？」攻撃	9			
3.11	罪悪感に訴へる攻撃	10			
3.12	「お前の XX を YY してやるためにどれだけ俺達が苦勞したと思っ てんだ」攻撃	10			
3.13	「隠れてコソコソするな」攻撃	11			
3.14	「お前はえらいんか？」攻撃	12			
3.15	「黙って××するな」攻撃	12			
3.16	「そんなこと云ふと後で××がな にするかわからないわよ」攻撃	13			
3.17	口を聞かない理由	14			
3.18	曖昧な指示	14			

リベラリズムは一見「なまくら」に見えるが、強い「しん」がなければ存立し得ないものなのである。そのことはリベラルという言葉を考えても判るだらう。「自由な」といふ譯語では、リベラルといふ言葉のニュアンスはつくされ得ない。リベラルな翻譯とは、自由奔放で雰囲気の出た翻譯といったところである。カネの面でリベラルといふと鷹揚でケチではないといった意味である。それは決して悪い意味ではない。だが、自由奔放に雰囲気を出しながら、でたらめとはちがう譯をすることは難かしい。それ自身難かしいだけでなく、極度に謹厳な人間からは非難されよう。カネの使い方についても同じで、鷹揚ではあるが亂費家でないことは難しい。しかも石部金吉氏からは非難される。つまり、リベラルな立場といふものは、自制心と強い自信とがなくては保持できない¹ものなのである。(高坂正堯, 1981「文明が衰亡するとき」新潮社。Punctuation と假名遣を變更した。)

2.1 他人の氣分に左右されない

人は相手の感情や氣分によって自分の感情を亂してしまいがちだ。怒ってゐる人につきあうと自分も怒ってくる。また、「あいつが嫌なことをするから、私もやりかえすのだ」という理屈はよく聞く。誰かの嫌な言動に接して自分の心が不機嫌な氣持ちでいっぱいになることは正當なことに思へる。だから、人はえてして、自分の氣持ちが不愉快なのを相手の言動のせいにしがちだ。

でも、それは自分は誰かに從屬してゐると告白してゐるに等しい。もっといへば

自分が不機嫌なのを誰かの言動のせいにしてゐる人は、自分は相手の奴隷だと告白してゐるに等しい。

もし、平和に尊嚴をもって暮したいならば、他人の氣分に影響される態度は是正しなければいけない。

2.2 堂々とせよ

クマやイヌに對峙した時に、必ず護るべき忠告がある。それは、「決して逃げはいけないこと。

¹引用者註：これは皮肉になつてゐる。自制心と自信が缺如した者は他者の自由を制限したり、他者を非難するものである。つまり、リベラルではないものは他者への過干渉ないしは抑壓により、自身の存在を保證しようとするわけである。それだけ弱い存在なのである(高坂節?)

後を見せてはいけないこと」である。野生動物(とりあえずイヌも含める)は自分より強いかわ弱いかを見極めてゐる。それは必ずしも現實の強さではなく、ある種の雰囲気である。逃げるものは自分より弱いことをアピールする。だから、彼らは自分より弱いと知って(思つて)追いかけるのである。逆に、「自分は負けないぞ」という雰囲気を醸しだしていけば、相手は自分か傷つくことを怖れて攻撃して來ない。それは人間も野生動物も同じである。攻撃する側は自信のなさそうな人を狙う。攻撃的な人間は與しやすい雰囲気、くじけて弱そうな人の雰囲気をカギつける才能がある。

だから、重要なのは自分が弱い雰囲気を醸し出さないこと。いつも堂々としていけば弱みに付け込む攻撃者も立ち入るスキがない。温和なものと軟弱なのは違う。軟弱なのは、人柄がやさしいように見えるが、相手に迎合することによって自分の保身を圖ろうとする戦略と見ることもできる。もし、さうなら、それは立派な態度ではない。直したほうがいい性狀である。もっとも、弱い雰囲気というのは生れつきさうなつてゐたのではなく、そのやうに育てられた場合も多い。どうであるかは人によりけりだが、解決するには、いったい何があなたの自信に齒止めをかけてゐるのかを觀察することが重要だ。たいていの場合は、弱い立場に自分を追い込んでゐるのは他でもないあなた自身だ。

堂々とするには、これまでの逆をすればよい。相手に自尊心があるのと同様に、自分にも自尊心がある。わざわざ小さく見せなくてもよい。相手の目をじっと見据えること。狀況が不愉快あるいは脅威なものになってきた時には特に、侮辱されたら眼力で睨みつけるものよいだらう。卑屈な愛想わらいなどしないこと。媚びは見苦しい所爲と知ること。バカにされた時にへらへら笑うな。自嘲するな。そんなもので同情を買つても役に立たない。邪魔になるだけだ。好悪や善惡を明快に。だらだら言い分けするな。哀願するな、懇願するな。自分に自尊心があるのと同様に、相手にも自尊心がある。

2.3 怒ってはならぬ。しかし怒りを感じたのならそれを否定してもならぬ

怒りは愚かものの所爲である。怒るのは、ハンマーで自分の指を叩くくらい愚かなことだ。怒りのすぎましい人は經驗があるだらう。壁に自分の頭を打ちつけたり、誰でも彼でも自分でも破壊せずには氣がすまない猛りを。怒りは、その方向が他人に向うにせよ自分に向うにせよ、利己的に見れば、自分を破壊する愚かな行爲であり、利他的

には自分と他人を汚染し殲滅する間違った行爲である。

私は、怒りを我慢しろと云っているのではない。人間の我慢などが知れてゐる。我慢しきったところで大爆発するか、我慢しすぎて自分を殺すか、どちらにしても賢者のとるべき道ではない。そもそも我慢した怒り、自分に向う怒りは鬱である。そうかといって怒りを木ッ端微塵にもできない。むしろ、自分のほうが怒りに支配されて「祟り神(モノノケ姫参照)」になって身も心もバラバラになる。気がついた時は手遅れである(気がつかないよりはいいが)。

では、どうしろと云っているのか？ 残念ながら、怒りにはトンプクのように外から強制的に救助する方法は存在しない。私には怒りを治めるためには自分を観察しろ、としか云へない。

- 1 まず、自分が怒っていることを認める。
- 2 自分に距離をもつ。
- 3 相手とも距離をもつ。
- 4 自分は誰かに怒らされてゐるから怒っているのではなくて、自分で怒りたいから怒っていることを知れ。
- 5 自分も相手も死すべき存在であることを知れ²。
- 6 その怒りにどうやってケジメをつけるか考へよ。

1 世の中には正しい怒り存在しない。だからといって自分が怒っていることを無視して、怒っていないフリをしても無駄である。4 かう書いてあるから かうだと思ふのは理解ではない。自ら自分はそうだったんだと知らないという意味はない。6 ケジメについてはケースバイケースで、復讐が間違つたことであることは論を待たないが、どうケジメをつけるかは、その人の人生に歸属する。

怒りを捨てることが理想だが、怒りを捨てることは無法を許したり甘やかせることを意味しない。それでは尊嚴(dignitās)がなくなってしまう。怒りを捨てても尊嚴をもって誤ちを糺したり、不幸の種を排除することはできる、というか、怒りを捨ててこそ、尊嚴をもって誤ちを糺し、不幸の種を排除することができる。

2.4 納得できないことに同意してはならぬ

能率人が能率人たりえるのは、どんな仕事でもこなせるからではない。望みが無い仕事、納得が

²「この者も自業自得でロクな死に方をしないのだ」と知ること怒りが収まる人もある。また、自分の生命の盡きることを知って、もっと大事なことに目が向く人もある。

いないことを拒否する勇氣をもっているからに他ならない。

もし、納得できないことが目の前に表われたら、それは自分がステップアップするチャンスだと思つてほしい。

納得のいかないまま、人の話をおとなしく聞いてゐたところで賢い人にはなりません。

力でもって他者を捻じ伏せやうとする人間が最も怖れるのは、意志をもつて自分を全うする人間だ。彼等は他者を捻じ伏せなければ自分が滅びる幻想にとりつかれてゐる。だから彼等にとっての最大の脅威は意志をもつて自分を全うする人間だ。彼らは壓殺しようとするかもしれない。しかし、それはたいてい最初だけのことだ。一種の動物的本能で、壓殺できないとなれば逃げる。なぜなら、彼等にとって相手を壓殺できない時は、自分が壓殺されるわけだから。

あなたに同意など必要ない。誰があなたに同意しなくても、あなたはあなたの気持ちがある。誰が認めてくれなくてもあなたはあなたの意志がある。誰が支持してくれなくてもあなたにはあなたの行動をする権利がある。

2.5 なにが一番大事か？ 心の星を求めなさい

人といふものは今自分の人生で何が一番大事かを考へた時に不思議と心が落ち着くものだ。

とにかく傷つかないで生きるには、自分の星を夢中になって追いかけるのが一番である。心に星をもつ人は、それを叶ふる力を必ず持つてゐる。

私には星がある。

これを思い出さなさい。人によっては自分には星がない、と思ひ込んでゐる人もゐるでせう。それは抑壓が重症だからであつて、星がないわけではない。見えていないだけだ。誰でも子供のころは目がキラキラしてゐたことを思い出してほしい。その星はいまもあなたを見守つてゐる。しかし、星が見えない環境に長く置かれてゐると、自分には星がないかのやうな錯覺に捕われる。さういふ錯覺を利用する愚かな輩もゐる。星がないと思ふ人は燃え盡き症候群³である。心療内科の診断書をもつて、貯金をすべてはたいて、どこか遠くに行きなさい(もし、少しでもやりたいことがあるなら、それをやりなさい。それが星かどうかはわかりませんが、星につながる何かかもしれない)。

³外因性抑鬱病

2.6 無知は罪ではない。失敗は恥ではない

奥行きが深い人は自分のことを卑下しがちだ。得てして、知らないことを劣ったことと思ったり、失敗したことを悪いことと思ったりする。そのため卑下する人は知らないことや失敗したことをネタに悪意ある人に攻撃されがちだ。

知らないよりも知っていたほうが、失敗するよりも成功するほうがよいに決まっているが、その自分の弱点を他人が利用していいわけではない。知らないことは罪ではないし、失敗は恥ではない。

無知や失敗の事實は、あなたが貶められることを正当化しない。

それらを隠そうとすべきでもない。隠そうとすれば逆に容易に目につけてしまうものだ。

あなたは自分の行動に対して自分で責任をとることだと思う。それは、間違え権利を有するということだ。そして成長する権利も。

2.7 完璧はありえない

完璧主義がどれくらい悲惨な結果をもたらすかは、完璧主義の人を観察してみるとすぐにわかる。彼(または自分)がそれでどれくらい損をしているか、箇条書にしてみるとうんざりする程、損をしている。

たいていの完璧主義者が理想とする完璧さは……絶対的な基準からすれば……完璧とはいへない未熟なものだ。それは、完璧主義者の批判する、常識人の基準と五十歩百歩である。どうやったら完璧には達せられないのだから、どこかで手を打たなければいけない。「どうやったら完璧には達せられない」という命題は決して、「いいかげんにやってよい」ということを意味しない。それは同じく愚かな極論である。どうやったら完璧にはならないし、かといって、テキトーではいけない。そこにバランスを見出すのが創造であり、決断である。完璧主義者は……場合によっては……決断をする勇気がないことを體裁よく胡麻化してゐるにすぎない。世の完璧主義者の背景心理はどうでもよい、問題はあなたの勇気だ。

補説：日本語は all or nothing しやすい文型をもってゐる(もちろん、その日本語をどう使うかは使う人の問題であって、日本語では all or nothing に考へなければいけないという意味ではない)。「彼はいつもやさしい」といふ文を単純に否定すると、「彼はいつもやさしくない」となる。これは彼は常にヤサクナイ(極論すればキビシイ)人であるという意味になる。いはば全否定である。これを英語で “He is always kind.” とし、これを否定

すると “He is not always kind.” となり、「彼はいつもやさしいわけでない(やさしい時のほうが多い)」と部分否定になる(全否定したければ “He is never kind.” とか “He is anything but kind.” とするとよい)。英語が論理的とか分析的であるとか、どうかといふことではない。All or nothing というのは英語であり、英語話者が all-or-nothing thinking から免れてゐるわけではなく(しかし、これを指す言葉をもつことによってそれに對して自覺的なことは評價すべきである)、どの話者でも all-or-nothing thinking となり得る。注意すべきなのは、日本語を使ってみて、単純に否定すると全否定になることである。

人間は自分が思つてゐるほど強くもなく、しんどい時ほど頭もはたらかなくなり、答えが簡単に出る all-or-nothing thinking になりがちである(普段から all-or-nothing thinking の人は普段から餘裕がないのかもしれない)。さういふ時に、なにかうまく行かないことがあつて、ある命題(信念・テーゼ等々)を否定すると、日本語の特性から全否定になってしまいがちである。であるから、否定の際には注意しなければならない。できるだけ限定的に、できるだけ正確に使うのがコツだ。

2.8 自分の幸福に責任をもつ

これは「他人の氣分に左右されない」原則の論理的歸結であつて、實際問題、誰もあなたの人生の幸福に責任をとってくれるわけではない。交通事故の被害者なら、損害賠償で人生の幸福が取りもどせるわけではないことを知つてゐるだらう。他人の人生の幸福に責任を取りたくても取れないのだ。だから、あなたは、自分の責任で人生を幸福なものにしなければならない。

これは辛い事實に聞こえる人もあるかもしれない。しかし、この事實は逆説的にあなたを不幸にする種々の物事から守つてくれる。誰も自分の不幸の面倒なんて見てくれないのだから、あなたが、自分に振りかかってくる不幸の種を排除することは正當なのである。そこに、「しがらみ」の介入する餘地はない。

私は私のために何をするか？

2.9 平凡でいい

世の中には自分が特別であることを証明したいがために元氣をなくす人がゐる。特別であることを証明するためにわざわざ元氣をなくす必要はないと思うのは健全な、あまりに健全な考へ方であつて、本人にとっては自分が特別でないということは時に死よりつらいことだと信じきつてゐる。

本人からすると、自分が特別でないことを認めることに比べれば心の病氣などたいしたことではない。もっとも、本人も知らない間にさうなってしまうことも多いだらう。本人もウスウスわかっていても気がついたらさうなっていた場合もあるかもしれない。でも、もし心あたりがあるなら、自分を特別視することを辞めて、自分が平凡であることを受け容れれば、いままでと違った見方ができるだらう。

ありていに云へば、自分を特別視しないと気がすまないのは自信がないためである。特別視とは自信の劣化した代替品である。

自信はどうやったら身につくか、もっとも単純な方法は自分で決めたことを実行することである。行動以外で自信をつけることはできないだらう。自信というのは形がない、まことに厄介なものであるが同時に融通無礙なものでもある。もつ氣になればいつだって持てるからだ。

自分を特別視するために過剰に落ち込んだり、似たような自己破壊的行爲は他にもいろいろある。自分を過度に責める行爲や放埒や無規範な行動も自分を特別視する行爲だ。これらの行爲の最大の問題は、それをしても解決しないことだ。たとへば自分を落ち込ませても自分が特別であることを証明できない。多少はあはれむべき存在に見せられるかもしれないが、それは特別ではない。なぜか？ 自分が特別であることは証明できないことだからだ。それは self evident(それ自身が証明=自明)だからだ。

いふまでもなく主観的世界では、自分が特別であることは self-evident だ。自分が自分であると感ずるのは他でもない自分だけだ。一方、客観的世界では、自分はまったく特別ではない、なにかと誰かしら共通するものがある。かといって、自分をまったく同じものは存在しないという点ではやっぱり特別な存在だ。あるいはこうも云へる、他の人が特別であるのと同じくらい自分は特別だ。自分は客観的には特別、特別ではないが普通に特別なことには違いがない、主観的には自分は自分という特別な存在だ、

鍵は行動である。人が行動しない時には二つの客観的世界と一つの主観的世界の間を思考がさまよい自分を見失う。なぜか。それは思考が static 動きのとまった世界の産物だからだ。考へというのほどこにも特別性はないからだ。たとへば、アルキメデスが浮力についての理解してゐること(アルキメデスの原理)と、私のアルキメデスの原理についての理解に違いはない⁴。行動することによって3つの世界が一つのものに關連づけられる。一つのもの、それはあなただ。なぜか。それ

⁴だから考へ・思考は共通認識たりえる。もし特別な考へがあったら、それは誰にも理解されない、誰にも傳はらない、かなり意味のないものになったるだらう

は廣報はどんなものであつても特別だからだ。たとへば、昨日、私は驛前の公園の清掃をしたとふ行動は特別だ(こう書いてしまうと特別ではなくなるが)、それは二度とない。明日、清掃するとしても昨日の清掃とは違う、人が違えば清掃内容も違う。行動は特別なものだ。だから特別でありたい、特別であることを実感したいと思うなら、なにより行動することだ。

2.10 ひきよせの法則

もし、あなたが、誰かを怨んでゐるなら、何十年後でも、そのチャンスは巡ってくるだらう。なぜか。それは、二度あることは三度あるのと同じだ。二度あつたことは三度あるだらうと思つて、期待して見てゐるからだ。あなたの心にある怨みは、怨みを晴らす機会を常に窺つてゐる。あなたが怨みを捨てない限り、きっと、その時が来るだらう。なぜなら、あなたの怨みはその時が来るまでずっと待つてゐるからだ。その時に、あなたは正々堂々と正常な方法で對處しなければいけない。さうでなければ、逆にあなたが怨みの因となる..

これを魅き寄せの法則といふ。嚴密な法則ではなく經驗則である。この法則は、漠然とあつてゐる程度だが、特に長期間で觀測した場合、二度あることは三度あるのと同じ程度に蓋然性をもつ。上は悪い意味(?)での魅き寄せの法則だが、よい意味での魅き寄せの法則もある。あなたが、こうであるとよいことを思へば、長期間のうちにもそのようになるだらう。

3 應答例文集

ここでは平和と尊嚴をおびやかす攻撃から心を守るための應答例をとりあげる。體系立てで分類することもできるし、抽象化して法則にすることもできるが、さういふものは得てして役に立たないので、ただ、ひたすら例文を揚げるに留める。なぜ、役に立たないのかは、思考は母語の習得と同じで、習うより慣れろ、であるためである。異國語や自然科学のように法則から入つても、實踐が伴われないので法則の適用方法がわからない。身をもつて知る他ないのである。また、人にはそれぞれ、その人の基質にあつた攻撃パターンや應答方法があるので、自分と基質が違う人のそれはピンとこないためである。たとえば、ここでは「罪惡感による攻撃」を重點的にとりあつてゐるが、人によっては「なにそれ、バカじゃないの？」で一蹴できる人もゐるだらう。さういふ人も違う攻撃には見事に弱點をさらけ出すこともある。つまり人それぞれであつて、網羅的にして、誰の役

に立つやうしても、往々にして、誰の役にも立たないためである。

3.1 ト라우マとパニック

この本は残念ながらトラウマやパニック状態にたいしてほとんど役に立たない。第一にトラウマやパニック状態にある時は過覚醒であったり低集中力状態であったりして、こんな小さな字は讀めない。理屈っぽいことを言われても理解できない。

この原稿が役たつのはトラウマやパニックが来る前までだ。トラウマやパニックが来てしまった時に一番大事なことは、自分を安全に感じられるように努力すること、そしてその努力は正しいと認識することだ。あなたが不安に感じたり恐怖に思っていることは決してツマらないことではなく、確かにあなたがさう感じるに値することだ。うまく對應しようと焦ってはいけない。そんなことより、あなた自身の気分が少しでもよくなるのが大事だ。走って逃げたっていいし、部屋でうずくまっていでもいい。

3.2 反論に際して第一に確認すべきこと

反論に際しては第一に、相手の主張を正確に把握しなければならない。相手の主張を把握せずに、自分の心の中の妄想を相手に格闘してはならない。そんなのは無駄で、下手をすると自分が怪我をする。

かういふ例がある。あなたが女性だったとして、誰かに次のやうに言われたとする。

「女には探偵稼業は務まらない」

註：「女」といふところにあなたの属性（男、修士卒、關西出身、太ってゐる等々）、「探偵稼業」とはあなたがやりたい/今やってゐる仕事を代入すればよい⁵。

かくも言はれては、相手の悪意と無理解にカチンと来て、即座に反論したくなる人もゐるだらう（少なくとも心の中でムカと来たり、あるいは非道く傷つくだらう）。しかし、直情にかられて即座に反論してはいけない。なぜか？ それは空回りするためである。相手は「さういふつもりでいったのではない」と辯解（あるいは言い訳、言い逃れ、抗辯）するだらう。実際に當方の勘違い、誤解、曲解だといふこともある。上のやうに云はれたと思つても、「相手の思った（意圖した）こと」

⁵よい例文が思いつかないので、ある小説とその本に因んだ漫画の書名から採った。女性に限らず不當な扱いを受けることはしばしばある。たとえば、「日本人には創造的な仕事はできない」

「相手が実際に云ったこと（逐語）」「當方に聞こえたこと」「當方が理解したこと」とは全て異なっており、「當方が理解したこと」が「相手の意圖したこと」ではない場合がある。反論が滑らないためには、正確に相手の主張を把握しなければならない。その上で、相手の主張は是であるか否であるか、是ではないなら如何なる理由で是ではないか、を追求すべきである。であるから、最初に問ふべきは、

「探偵稼業とはどんな仕事ですか？ そしてなぜ務まらないのですか？」

である。相手は無能あるいは熱意の低さから、仕事を定義できない場合がほとんどであり、なぜ務まらないかについても明解な回答を得ることはほとんどの場合できない。要するに感想を述べてゐるにすぎないことが多い。誰しも感想を述べる権利はあるので、それ自體は結構なことだが、あたかも自分の感想が絶対に正しいかのような體裁をとつてゐることが問題なのである。無能あるいは熱意の低さかとはともかく、これ以上の補足説明がない言及にこれ以上つきあう必要はもともとない。

もし感想とわかつたなら、あなたは撰擇できる。この人の感想を變えるためになんらかの行動を起こすこともできるが⁶、あなたは自分のやりたいことを實現することへの影響を見極めた上で、この人の感想に干渉するかしないか、するとしたらどのやうにするか、どこまでするかを撰擇できる。

3.3 「世の中はそんなものではない」攻撃

「世の中はそんなものではないのだ」

應答：

「世の中は、さういふものかもしれないが、それは正しいことではない」

「現時点では、さうかもしれないが、それは努力して變へていかなければいけないことだ」]

現實とは端的に既成事實と同一視されがちだ。そこでは「現實を見ろ」「現實的であれ」ということは既成事實に屈伏せよ、とふことに他ならない。しかし、現實とは與へられたものであると同時に、一方では日々、造られていくものである。したがって、「現實=所與のもの(與へられたもの)=動かないもの」といふ見方は一面的で間違ひである。現實の二面性については丸山眞男によつた、

⁶相手の意見を變へさせることは人生の目標にはなるべきではないし、また人は他人に言はれて意見を變へるやうなものでないので、いちじるしくお薦めではない。

3.4 「そんなことは世界では通用しない」攻撃

‘世界を知ってると自認する某氏’曰。
「そんなことは、世界では通用しない」

この言明はよく聞くもので、権威を笠に着てさういわれると反論できない場合が多いだろう。しかし、「世界」というのが何を指してゐるのか曖昧(語義曖昧の虚偽)で、‘世界を知ってゐる某氏’と聞いてゐる人とで同じものを考へてゐるとは限らない。「世界」といふ言葉が曖昧なために、聞いてゐる人はなにかとてつもないことを想像しがちであるが、実際は「世界」とふのはたいてい、アメリカの誰かの派閥のことや、自分と同じ意見の人達のことである場合が多い。もっといへば、「世界」とはその人自身のことだと思つて差し支えない。であるから、このような言明には

應答:「『世界』とは、どの世界のことですか?、具体的に誰と誰のことですか?」

と聞きかへせばよい。また、

「そんなことは世間が許さない」「社会的に葬られる」

とは、ご本人が「許さない」、ご本人が「葬りたい」にすぎない(場合がほとんど)。個人が自分で考へればよいことに、わざわざ「世間」や「社会」をもちだすのは注意をそらす錯誤(煽製煉)であると同時に、自分の意見に自信がないことを表明してゐる。であるから、讀者諸氏は恐れる必要はない。

「世間って誰のことですか?」

3.5 冷笑屋の攻撃

冷笑屋といえば、おそらく説明は不要だらう... 説明(略)... 冷笑屋は虚無主義に掴まった人達のことだ。しかし冷笑屋の行動には矛盾がある。本来の虚無主義者は、議論や討論、人との意見交換・交流は無駄だと見切つてさういふものには参加しないのが普通だし、彼らの主義の論理的歸結である。しかし、冷笑屋は意外にも、そのような交流の場に出没し、参加者の發言をかたっぱしから否定してまわる(自分が否定できないものについては無視する)。おそらく、理由はかうである。生きてゐることに価値を見出せない彼らにとって、なにか価値のあると思つたことに打ち込んで情熱を傾むけ、生き生きとすることは容認できないからだ。

彼らと、その他の参加者は同じ土俵で交渉してゐるわけではないことに注意する必要がある。交流の場に参加してゐるように見えて實は参加してゐない。彼らは、アリの群を弄つてゐる子供に近い。人が(アリが)一生懸命にエサを運んでゐるのをとりあげてアリが右往左往してゐるのを上から見て愉しんでゐるのだ。アリにとって子供は絶對的な優位にある。アリの格好をした子供が紛れこんでゐると思へばよい。氣にいらぬことは子供が絶對的な權力でもつて排除する。

彼らは自分を絶對的な立場に置くことによって自分を特別な存在だと實感してゐるのである。それは、自分は凡人であることに耐へられない不安の裏返しでもある。彼らがつと上位の立場の者によってアリのようになされることはおそらく最悪のことだらう。たとへば、つと上位のスゴイ人に「なんてバカなことやってんだ、アホか」と一蹴されることである。これが彼等の弱點である。

彼らも自分の弱點を把握してゐるかうすうす氣がついてゐるので他者を自分より優位に置かない(もちろん對等にも耐へられない)。そんな状況で、彼らに對應する最良の方法は自信をもつことである。たとえば、冷笑屋に「それが絶對に正しいとはいへない」といはれても「それがどうした?」と問い返せばよい。心ある人は、絶對に正しいとはいへることなどないことを知つてゐる。それでも何かしらの前進を求めて行動してゐる。彼等は、そんな心ある人たちがうらやましくもあり、また脅威でもある。なにかを積極的に主張するというリスクを冒さない彼らにとって、「これはかうである」となにかを自信をもつて明確に主張する人間は最大の脅威である。

3.6 「話にならん」攻撃

例:

「そんな意見は話にならん」
「どうして、そんなくだらない質問をするんだ」

とにかく一蹴し、一喝し、切り捨てる攻撃である。この攻撃のずるいところは理由を述べていないところである。ご本人にとっては理由はいふまでもなく明らか、なのかもしれないが、あなたがそれを前提をする必要はない。

主張には根據が必要である。それを提示するのは相手の責任であつて、あなたが氣をきかせて理解してあげることはない。理由もなく却下されて、あなたが黙つて引き下がらなければいけない法はない。

對策は、罵倒とか侮辱とかに對する應答を別すれば、基本的には「ご本人にとっては理由はい

ふまでもなく明らか」かもしれないその理由を云はせることである。

「どこがどう話にならないんですか？」
 「そんなことは云ふまでもない。話にならないものは話にならない」
 「私にはわかりません。理由を云ってください」
 「そんなこともわからんのか。お前はそれでも学校を出てゐるのか(他、侮辱の言葉)」
 「わかりません(キッパリ)。あなたこそ、理由も説明できないんですか」

重要なのは、あなたは焦点をあわせて一点突破で執拗に理由を訊きつづけることだ。話が逸れてはいけない。そうなったら、あなたが話を逸らしたのだ。

もし、相手が誠實に理由を陳述するなら、もちろん、あなたは傾聴しなければいけない。その主張が正當だったら、あなたはそこから学ぶべきだし、その主張が不當だったら、今度は逆に、その主張をあなたが批評することになる。

3.7 暴言による攻撃

相手が暴言をわめきだした時は、涼しい顔をして、「すみませんが、もう一度、おっしゃってください」というのがよい。理由は云はなくてもいいが、「よく聞こえなかったから」でも「他の聴衆が聞こえなかったようだから」でもなんでもいい。これは相手が感情的な言葉を口走った時に有効な方法である。相手の暴言を軽く聞きながすことがポイントである。

感情に駆られて口走った激情を二度と同じ調子で繰り返すのは常人にはむづかしい。まともな神経をもった人なら内省して口ごもるだらう。

相手の暴言に乗って、こちらも暴言で返してはならない。それは挑発である。

たとへ相手に非があろうとも、粗暴な言葉で相手を非難してはならない。粗暴な言葉は苦痛となって相手の中に残る。そして、仕返しがあなたの身に至る。(ダンマバダ)

むしろ、怒ってゐる人を見れば、かう思ふとよい。

非難の量はまさに非難してゐる人が感じてゐる無能さを示してゐる。(G.M.Weinberg)

また、善良な人は暴言を聞かされるのに耐へられないし、暴言をわめかれると圧倒されてしまうが、実際は暴言ほど発言者の立場を決定的に弱めるものはない。場合によっては脅迫などの犯罪に該当することすらある。ある人の暴言が知らないうちに録音されて、それで墓穴を掘ったということはしばしばあることだ。では、録音されてゐない環境や密室なら暴言は可能か。それは違う。悪事をなす時、人は最大限の注意を要し、注意は継続しなければいけない。気がゆるんだ時にポロッと洩れた悪事の断片から芋蔓式に暴露してしまう。常に注意しつづけるのはつらい。粗雑な者には悪事は努まらない。話を戻す。たとえば密室なら暴言をいっていいと思つてゐるやうな粗雑な者だったら他でも粗雑に悪事の断片が洩れてゐるはずだ。まさにその密室の暴言は取り締まなくても、他の件でその者は墓穴を掘つてゐるから、それを取り締まればいい。

暴言を吐くのは、なにより暴言を吐いたものにとって不利になる。

暴言は吐いたものにとってのダメージなにより大きい、それを勘違いしてはいけない。このようなことを踏まえると、暴言にさらされた時に繰り返させる防御以外の防御も可能である。それは謝罪を要求するという防御である。無自覚にハラが立ったから謝罪を要求する、というのではない。厳密に相手の暴言を悪事と認定して追求する姿勢があつてはじめて謝罪の要求は効果をもつ。相手は、謝罪に應じないかもしれない。しかし、相手が謝罪に應じるかどうかは、この際関係ない。こちらは謝罪を要求することで相手をいはば告發し、相手が悪いと宣言してゐるわけで、相手は自分の暴言を正當化するか無視するかに追い詰められる。暴言を正當化することはほとんど不可能だから、無視することが多いだらう。相手も無視することは逃げてゐると半ば自覚するので、今回はともかく、すくなくとも次回からは暴言にさらされる危険は少ない。

謝罪と要求するときは、話がブレてはいけない。謝罪してほしいことに焦点をしばつてそこから外れてはいけない。(みんな... 攻撃での問答を参照のこと)

3.8 「本當のことだから」攻撃

感情的な虐待をしておきながら、「本當のことだから」といって虐待を正當化する人もゐる。正直の美德というわけだ。この「本當のことだから」「正直は美德でせう」は隠れ蓑でしかなく、あなたがそれを眞に受ける必要はまったくないのだ。問題は、「本當のこと」かどうかではなく、「本當

のこと」なら何を言ってもいいのか、ということだ。云はなくてもいいような悪意のある批判(實は非難)や人を打ちのめす言葉が「本當のことだから」といふ旗印のもとで口にされる場合が少なくない。相手を傷つけるだけで、何の役にも立たない言葉は云ふ者の「正直さ」ではなく、怒りや嫉妬を表わしてゐる。

かう覚えておくべきだ。

「本當のことだから何を云ってもよい」といふのは無神経以外の何者でもない。本當のことだからという盾で残酷さを合理化するのは倫理の崩壊でしかない。

3.9 「お前はわがままだ」攻撃

これは相手に罪悪感に訴へる攻撃(後述)である。誰しもいくばくかの良心を持ち合せてゐるから、罪悪感に訴へられると弱い。この攻撃にはいくつか應答の方法がある。簡単なものは、

- (1) 聞きながす。
- (2) thank you for your suggestion.

である。簡単というのは雙方にとってである。この攻撃は、あなたの良心を狙つてゐる。これをよく把握してほしい。誰でも(多くの人は)「自分はわがままであつてはいけない」という方針をもつてゐる。だから、「わがままだ」と云はれると自分が悪いかのような気分になる。

しかし、自分の心を正直に観察してほしい。「自分はわがままであつてはいけない」と思うのは果して良心か? それは「人に嫌われたくない」という自分の「わがまま」に過ぎない。どうやっても「わがまま」なのだ。私たちは、自分のわがままから逃れられない。

次に、その「わがまま」は、自分を幸福にしてゐるのかしていないのか、それを検討すべきだ。「人に嫌われたくない」という「わがまま」は結局、容易に他人の奴隷になる口實になりかねない。「人に嫌われたくない」は自分を幸福にしない。だから、この「わがまま」には退席ねがおう。ここは自分で考えて納得しないと身につかない。

自分を傷つけることは崇高なことでもなんでもない。他人を傷つけることと内容的にはまったく等しい

ここまで来ると、もう一つ別の應答が使用可能になる。

- (3) 「その通りです。私はわがままと呼ばれることを目標にしてみました。氣付

いてもらえて光榮です」

- (4) 「私は、私が幸福になるために行動しています。それはわがままな行爲ですが、誰でも自分の幸福を追求する権利を有します」

3.10 「人に迷惑をかけていいのか？」攻撃

例: 「お前のやろうしてゐることは會社(社會, 組織等々あるいは私)に迷惑をかける行爲だとは思はないのか?」

「お前は自分がわがままだとは思はないのか?」

「お前は、それでも人間か?」

内容として前述した「お前はわがままだ」と同じで罪悪感に訴へる攻撃であるが、これは疑問文の形で提示されてゐるところに特徴がある。これは疑問文の恰好をしているが疑問文ではない。修辭學(レトリック)でいふ修辭疑問の一つ、反語である。反語とは自分の主張をあえて否定形の疑問文で提示することによりより強く主要するレトリックである。例えば「櫻を見て心動かされない人がゐるよか? (いや、ゐまい。全員、心を動かされるだらう)」というのが反語だ。だから、これらは補完すると眞意は「人に迷惑をかけていいのか? いや絶対にダメだ」「お前わがままではないか? いや絶対、わがままだ」「お前はそれでも人間か? いやお前は人間の名に値しない」になる。これらをここでは眞意命題と呼ぶことにする。

注意すべきは、疑問文は論理學においては命題ではない。だから、形式上(論理學的には)、この人はなにも主張してゐないことにあつてゐる。しかし、質問の恰好で主張されてゐるので自分の見解を述べないといけないような雰囲気させられてしまう。單なる質問であれば、返答しなければ、こちらはわからない、あるいは逃げたものと見做されるが、このような修辭的反語は、ほとんど全ての人が眞意を悟るので、答へないと眞意を認めたと見做されてしまう。しかし、たいがいにおいて答へにくい。結果、眞意命題を認めた恰好になる。立場を變えると、眞意命題を無理やり認めさせられる。これは對話において反語が卑怯である理由のひとつだ。

對策: 反語でモノを云ふ人間は、眞意の正しさを確信しきつてゐる。盲信といつてもいい。だから、あへて、ストレートに返答してみるのが一つの方法だ。前述の「お前はわがままだ」の應答例(3)や(4)のように、「はい、そうです」と答へてみるのだ。それによって彼らの盲信を動かすことができる。反論されてゐることに慣れてゐない彼

らに反語による攻撃が無効だといふメッセージを與へることができる。

盲信と書いたのはわけがある。もし心底、本人がその眞意命題に納得してゐたなら直接、眞意命題を云ふはずだ。そうでないのは、彼らは、眞意命題が論證として正しいとは思つてをらず、信じてゐるだけだからという可能性が高い。

3.11 罪惡感に訴へる攻撃

先に述べた「お前はわがままだ」攻撃や「人に迷惑をかけていいのか？」攻撃は、この攻撃の變種である。

例：世の中には仕事もなく、困つてゐる人が大勢ゐる。それに比べるとお前は、随分恵まれてゐる。だから、お前はXXすべきだ。

分析：一讀してわかるやうに、これはあなたの罪惡感に訴へてゐる。自分が恵まれてゐるのだから罪惡感を感じろ、XXしないと、もっと罪惡感を感じるぞと脅してゐるのだ。

正攻法的對策：もちろん、あなたは罪惡感を感じる義務はない。(1) 誰も人の感情を操作する權利はない。あなたは、自分の罪惡感を感じることを撰擇できるのだ。もちろん、感じないことを撰擇することもできる。最初に、(2) なぜ、あなたが罪惡感を感じるべきだと主張するのは理由をはっきりさせねばならない。理由も提示されないのに相手の主張を鵜呑みにする必要はない。更に、(3) 相手の主張には、XXすれば罪惡感から解放されるとふ確かな保證はないことに注意しなければいけない。なぜXXしなければいけないのか理由をはっきりさせなければいけない。あなたが罪惡感のためXXをしたなら、相手は今度はYYをすべきだといふかもしれない(XXとYYにはたとえば「獻金」「全財産の獻金」が入る)。それに、恵まれてゐるからといって、XXしなければいけない必然性については述べられてゐない。あなたが自分で撰擇したAAAという行動だつていいかもしれない。

注意：罪惡感に煽られて相手の主張を鵜呑みにしてしまうことは、仕方ないことでもなんでもなく人として弱いことだと自覺すべきだ。場合によっては、犯罪的な結果をもたらすこともある(YYに「反對派の肅清」が入ることだつてある)し、結果がどうであれ、理由をはっきりさせず、納得もしてゐないのに行動するのは無責任な行爲だ。弱い人はくれぐれも注意されたい。

3.12 「お前のXXをYYしてやるためにどれだけ俺達が苦勞したと思つてんだ」攻撃

XXやYYには、「就職」「斡旋」、「昇進」「推薦」、「成績」「向上」等の言葉が、それぞれ代入される。

これも罪惡感に訴へる攻撃で、恩を賣りつけて相手の思考を支配しやうとする攻撃である。「お前はわがままだ」と同じで、たいてい人は多少なりとも罪惡感をもつてゐるから、このやうに言い寄られると弱いかもしれないが、これまで述べて來たやうに、罪惡感に訴へる攻撃に屈することは間違つてゐる。

第一に、誰も他人の感情を食いものにする權利はない。恩を感じるかどうかはその人の裁量である。罪惡感に訴へる攻撃に對する正攻法の對策を思い出さう。

第二に、なぜ、恩だけを俎上に乗せなければいけないのか。その必然性は、人間關係を支配する企圖以外には考へられない。人間關係には恩もあるが、常に害もある。逆に、むこうからみた恩と害もある。それらの比率はいろいろであっても、全てを俎上に乗せ、検討することを認めるのが對等な人間關係である。

話は少し飛ぶが、「尊屬殺」を「殺人」より重罪とする刑法の規定(いはゆる刑法200條、現在は削除)が違憲になつた経緯を思い出さう。尊屬(親や祖父母など祖先筋・目上にあたる親族)を殺した場合は、一般の殺人よりも重罪とされ、處罰が重くなつてゐた。一般の殺人では5年以上の期限つき浩役または無期浩役・死刑で情狀酌量や執行猶豫とつけることは裁量の範圍であるが、尊屬殺では無期浩役か死刑しかないし、執行猶豫はつけられない。これでは殺されても仕方のないやうな、どうしやうもない親を殺した場合でも情狀酌量できなかつた。ある裁判でこのことが問題になり違憲判決が下された。

子が親に恩を感じるのは正常状態では当たり前であつて、当たり前前の狀況では親殺しは起りえない。それでも親を殺すといふのは恩をはるかに上まわる怨みがあるからかもしれないわけで(もちろん、それ以外の原因もあるだらう。それにどんな理由であれ、罪が罪でなくなることはない。私は犯罪を擁護しない)、狀況を考慮せずに一律に尊屬だからといって、どうしやうもない親を人間である以上に保護する必要はない。

これと同じ様に、どれだけ恩をその人からもらったとしても、それをキャラにして餘りある害をその人から受けてゐる場合だつてあるのだから、單純に恩だけ見て罪惡感を感じることは不當である。害を無視することを強要する義理は誰に

もない。

「當方の損害を考慮しなかったら、誰でも名將です」

害を無視することを強要すれば、どんな人だって恩人である。恩を賣りつけて相手を支配しようとする人がゐたなら、その人の恩と害とを考慮して respect に値 するかどうかを検討しなければならない。恩だけを考慮して害を無視することがあつてはならない。逆もまた然り。それが自分の良心に照して判断するということだ。

恩を賣りつける人は、賣りつけるくらいだから、たぶん恩はあるのだらう。だからといって恩だけしかないかどうかは別である。むしろ、普通はわざわざ恩を賣らなくても恩を感じて恩に見當った行動をするもの(たとえば親の恩を子供に返すことだつて恩に見當った行動だと私は見做す)を、わざわざ押賣りするくらいだから、恩以外に押賣りしなければ買ってくれない害悪を持ちあはせてみるかもしれないと豫想するのは十分に合理的で、妥當な判断だ。冒頭の質問(修辭疑問攻撃)には、「これまであんたと付き合うのに、私がどれだけ苦勞したと思ってるんだ」と言い返すことだつて可能である。

ここまで讀んだ讀者にわざわざ對策を述べることはしない。讀んだあなたが罪惡感による支配から自由になることが第一だ。

恩を押し賣りして人を支配しやうとする者に警告する。恩は、恩を與へられた人にそれなりの影響を與へる。もし、あなたが誰かに恩を打つて、相手がかはらなかつたなら、それはあなたの恩がそれだけのものだったといふことだ。ラフに云へば、誰だつて誰かからなにかをもらつて生きてをり、誰かに何かを與へて生きてゐる。ある人がまったく恩を感じない人であっても、逆に、恩を感じないことで、誰かに對する恩(というか仇)を返してゐるのだ。それが合理的あるいは妥當な行動でないとしても(たいていさうだが)、それはその人の人生だ(もちろん犯罪は處罰される)。それにあなたは恩返しをほしくて、恩を賣りつけたのか? 恩は投資ではない(投資だつて、いつもリターンがあるとは限らないが)。恩は支配の道具ではない。そんな恩ならば誰だつて逃げだしたくなるのが當然だ。最後に、恩をわざわざ指摘しなければ恩を感じないやうな相手では、恩返しなど期待するほうが無駄といふもの。借金のとりにたてみたいに、あれもこれもと恩をリストにしなければ返してくれないだらう。

蛇足:本筋とは關係ないが、冒頭の修辭疑問にある「俺達」が本當に「俺達」なのか「俺」なのかは熟考を要す。もし、その人以外はそんなに苦勞してゐない、「俺」個人の苦勞なのに「俺達」と

言及するなら、それは不正確な言明である。「俺達が」ということで苦勞を大きく、他の人も巻き込まうとしてゐる。實際はこのやうなワキの甘い言明を含む argument を破綻されることは容易である。

3.13 「隠れてコソコソするな」攻撃

これも相手の罪惡感に訴へる攻撃のバリエーションの一つ。「正しいことをしてゐるなら隠れてコソコソしてはいけない」という道德律を逆手にとつて、「隠れてコソコソしているということは、それは正しくないことだ」という結論もつていき、相手の動きを封じ込める作戦である。この攻撃を浸透させることができれば、相手を萎縮させることができる。それが狙いだ。

この攻撃は簡単に否定できる。たとえば、驅け落ちを事前に表明する者はゐないし、自分たちの隠れ家を公開するマキ(maquis)⁷もゐない。ナチが「隠れてコソコソするな」とパリ市民に云ふのは、あまりにも下手なジョークだ。驅け落ちを事前に表明しないからといって怒る親は筋違ひをしてゐる(驅け落ちそのものに怒るのは正當かもしれないが)。

この例は森毅による。森毅は教授であつたときに學生が事前に「出席日数が足りなくなる豫定だから斟酌してほしい」だの「試験日には用事があつて來れないので追試してほしい」だのと云つてくることを嘆いて、相手(つまり森毅)が「ダメです」といはれたら、どうするのか? 出席日数を確保するつもりなのか? 試験日に來るつもりなのか? もしさうなら最初からさうせい、さうでないなら事前に甘えたこと云ふなという趣旨のことを(ユーモアたつぷりに)云つていた。そして、「息子や娘が事前に驅け落ちしたいと云へば、親は不許可に決つてゐる」と締める。いふまでもないが親が許可したなら、それは驅け落ちではない。

「隠れてコソコソするな」という命題(正確には、命令)に従うならば、「隠れて」でしかできないことは存在を否定される(例、内部告發)。そして、本來公開の必要のないはずの「隠れて」してよいことだつて(例、私生活)だつて存在を否定される。世の中には「隠れて」しなければならないこともあるが、それも存在を否定される(極端な例で云へば、裸は隠さなければいけない)。「隠れてコソコソするな」は、多くの場合、個人の權利を剝奪し、管理(control=支配)を容易にするマジックワードとして機能することになる。なぜなら、「隠れてコソコソするな」と云つてゐる本人が自分に對して同じだけ公開しているかというとうではないからだ。つまり、「自分に教えろ」と

⁷第二次世界大戰でナチ占領下でのレジスタンス組織

云っているだけにすぎないわけで、そんなものに従う必要はない。

もちろん、隠れてしてはいけないこともあるだろう。正確には、隠れてすることを正当化できないこともあるだろう。隠れてしないほうがよい、むしろ公開したほうがよいことだってあるだろう。だからといって、一律に「隠れてコソコソするな」という批判はあたらない。隠れてしてよいこと、隠れてするしかないこと、隠れてしなければいけないことだってあるからだ。自分のそれがどれに對應しているか見極めた上で、この攻撃に對應しよう。正当な批判の場合もある。

3.14 「お前はえらいんか？」攻撃

例：ある飛行機のなかで、乗客が前の席の老人と口論になり、その乗客は足で前の席を蹴ったり、暴言を吐くなどの横暴な行爲をした（なお、航空法改正後はこれは航空法に觸れる行爲である。ただし、改正後も暴力を振る乗客に對して實力で阻止できる態勢になってみるかどうかは注意しなければならない）。ステイワーデスが注意すると、横暴な乗客は「これは俺とこいつの問題だ」といふ。もちろんステイワーデスも引き下りはない。横暴な乗客は「お前は口出しできるほど、えらいんか？ えええ！」

このような話術でひるんでしまう人は多いだろう。なんとすれば、面とむかって自分はえらいと云へる人は少ないからである。たいていの方は、自分のことを偉いとは云へない、だから注意もできない、と思ひ込んでしまう。

しかし、問題は「えらいかえらくないか」ではない。前の人の席を蹴るといふ暴力、暴言を吐くことをしてよいのかしてはいけないのかである。これが論理のすりかえである。「えらいかえらくないか」は關係ないのだから、質問に答える必要もない。

應答：「えらいかえらくないかは關係ない。席を蹴ることは暴力であり、許されない」

論理のすりかえは、相手の主張してゐる論理とは別の論理を挿入することで、相手の論理の進行を妨害し、自分に都合のよい結論を導く方法である。知らずにしてゐる人も多いが、知ってすりかえる場合は詭弁である。論理のすりかえ攻撃は、自分の本題からはずれないことで容易に防ぐことができる。要は、なにかありさうなニシンに飛び

つかないことである。知らずに論理のすりかえをやってしまう人は、問題の正面からとりくんでみるか内省することで防げるかもしれない。わざとやってみる人には自分を貶める行爲だと指摘するに留めよう。

ちなみに、同じことをされたある元警官は「これは暴力です。こんなことは私は許せません。謝罪を要求します」と毅然といった。相手の主張は聞いていない點で評價できるし、暴言には暴言で返さず、あくまで毅然と對應した點で評價できる。

3.15 「黙って××するな」攻撃

これは、コミュニケーション（コミュニケーションはもちろんフランクでなければならない）に問題がある人間關係で、立場の弱いものが、しょうがないから黙ったまま、なにかをすることがある。それを後で立場の強い者が非難するときに、「黙って××するな」といふ。

もちろん、内容によっては黙ってしてはいけないこともある。そこは冷靜に黙ってしてよいことなのか悪いことなのかを判断しなければいけない。しかし、より自分に念を押してほしいのは、立場の弱い者が黙ってしまったのは、それを云ふだけのラポール（良好な人間關係）が存在していなかったからだ、ということ。コミュニケーションがうまくいっていない、フランクに話せない、その時點で既に問題が生じてゐるのである。その時點でミサイルは發射されてゐるのである。黙って××して問題が表面化したのは單に着弾したからに過ぎない。

部下は飼犬ではないが、

飼犬に手を噛まれるのは主人に問題があるからだ、

という警句を忘れるべきではない。立場が上の人は猛省を要すし、立場が下の人は、必要以上に自分を責めることはない。

マーケティングの法則：

客はあなたの店（商品、宣傳等々）のどこが悪いか決して語ってくれない。ただ、黙って立ち去るのみ。

というのがある。立場が上の人間は、したがって自分のどこが悪いのか誰も面とむかっては指摘してくれないために、フィードバックしにくい。注意しないと賣れない店の店長になってしまう。部下は黙って立ち去るのみ。

権力は墮落する。なぜなら権力が徹底的に墮落させるものは觀察を意味づける能力だからだ。（G.M.Weinberg）

補説「黙って××すべき」場合

あなたが、なにもかも報告あるいは公表しないといけない、「黙って××すべきではない」と思っているとしたら、それは勘違いである。むしろ、報告してはいけない場合もある。なんでも報告・公表しなければいけないといふのは、次のような教育訓話に端的に示されてをり、ここで批判する。

北アルプスおよび黒部峡谷に物資を届けるヘリ会社が安曇野にあった(北アルプスに登山した人ならよくご存知だろう)。ある晩、黒部峡谷の建築現場から電話があった。内容はこうであった。作業員が大怪我をして、2~3時間以内に専門の治療をしないと死んでしまう。ヘリで麓の病院まで搬送してくれないか、といふ。ヘリ会社は躊躇した。なぜなら、夜間の黒部峡谷でのヘリの航行は航空規則で禁止されており、ヘリを派遣することはできないためだ。規則に違反するが、社長とパイロットはヘリで救出にむかふことにした。通常、飛行する場合、フライトプランを羽田の管制官に提出しなければいけない。今回は規則違反なので、副パイロットがフライトプランを提出することに反対した(受けつけてもらえないため)が、パイロットは「法は法だ」といって、提出した。管制官は事情を聞いた後、「人命は法より重い」といって許可した。そしてヘリは黒部峡谷に飛びたった。

よくありさうな訓話であるが、實は重大な問題を含んでゐる。読む方は美談に惑はされて、どんなことでも報告・公表しないといけないと思込まされる。

問題は、パイロットの側と管制官の側、両方にある。

まず、管制官の側から述べる。管制官の立場としては規則に照らして、「行くな」としか云へない。上述の逸話のやうに許可してしまえば、許可した責任がある。管制官は責任を意識して許可したのか。意識した場合、自分の責任はどこまでであると考えたのか?(この短編の逸話から読みとることは不可能である)。

次に、パイロットの側の問題を述べる。こちらのほうが重大である。もし管制官が許可しなかったらパイロットはどうするつもりだったのだろうか? 「法は法だ」といふのだから認められなかったら飛ばないつもりだろう。単純に考へるとさうなる。しかし、判断の順番からして、パイロットは救出に向うことを決めてゐたのだろうか。止められても救出に向うならば、「法は法だ」といふ自分の信念に反することは云ふべきではない。おそ

らく「一應連絡しとく。許可されなくても突っ切る」といふのが信念の表明だろう。

また、「法は法だ」といふのは調子がいいが、規則違反を知った上でのフライトプランの提出は、實際は管制官を巻き込む、つまり連帯責任にする身勝手な行爲である。それを見越して提出したなら、規則違反の責任を管制官にも負はせやうとする、つまり違反の責任を轉嫁する卑怯な行動である。管制官からすれば、そんなこと云はれたって困るだけである。規則に照らせば許可できないし、許可しないとしたら、人命救助を妨害してゐるやうな感じになるし...。しかし、それは感じにすぎない。作業員の人命も重要であるが、パイロットの生命も重要である。溪谷が夜間飛行禁止になってゐるのはそれが危険だからである。許可するということは管制官が、パイロットの安全は確保されないが、それでもよいといふ判断をしたことになる。その権限は管制官にあるのか(これ以上はこの逸話から読みとれない)。

この事例では、フライトプランの許可を求めるべきではない。むしろ、求めてはいけない。上で述べたやうにそれは身勝手に、わざとなら卑怯な行爲だからである。さうでなくても自分の責任と相手の責任に含ませる無責任な行爲だからである。世の中には、黙って××したほうがよいこともあるのだ。いや正確には違う。正しくは、世の中には、黙って××しなければいけないこともあるのだ。これに気がつけば、「隠れてコソコソするな」攻撃にも十分對處できる。同じことだからである。

3.16 「そんなこと云ふと後で××がなにするかわからないわよ」攻撃

この發言は忠告のつもりかもしれないが、はっきり云って××に加擔してゐる。云つてゐる本人には自覺はないかもしれないが、××の恐怖を煽ることによって、結局××の抑壓を肯定し、××の支配力の強化に貢献してゐる。××はなにも手を下していない。忠告者が××の手先となつてゐるのである。××は一人であるが、忠告者は10人にいれば××の攻撃力は10倍にならないにしろ増してゐる。

云つてゐるご本人は気がつかないだろうけれど、その人は××の支配に服屬してゐる憐れな人だ、と思つてほつておくのが一番よい。なんせ、ご本人はよいことをしてゐるつもりなのだから、水を差すまでもない、ご本人が望まない限り。

逆に、忠告したご本人も××の支配から逃れたいと思つてゐるのなら、「忠告のつもりでも、それが××に加擔してゐる」と簡潔に伝えるのは役立つだろう。

3.17 口を聞かない理由

口を聞きたくない人がゐる時、理由を説明しなければならぬかのやうな錯覚を感じる人がある。

「どうして〇〇について云はなかった？」
 「私はあなたと口を聞きたくないからです」
 「なぜだ？」
 「それはプライベートなことなので、お答えする必要はありません」

これは強烈な拒絶であるから、使うほうは用心して使わなければいけないが、プライベートについては聞かれても答える義務がないことを覚えておいたほうがよい。

「私がどう感じてゐるかは、私のプライベートなことですから、それを公表するかどうかは、私の自由です」

3.18 曖昧な指示

上司が曖昧な単語だけ並べて指示を與へ、解釋を部下に委ねる、といふことはしばしばある⁸。部下と上司との間で良好な人間関係があるなら、曖昧さをお互いに紐解いていくことができるだろう。しかし、良好な人間関係がないなら悲惨だ。部下は、上司に単語の具体的な意味を尋ねることすらできないまま、曖昧な単語が意味しているだろうところを整理し、明確にしなければいけないかのやうな錯覚に陥る。そして、その整理やら解釋を間違えた場合、それは部下の失敗であつて、指示を出した上司の失敗とは見做されない(眞實は、部下の失敗であると同時に上司の失敗でもある。)

しかし、よく考へてほしい。上司は説明する手間を惜しんで曖昧な単語を羅列し、部下はその‘後始末’をさせられてゐるわけだ。部下の解釋が氣にいらなければ、上司はいくらでも文句をつけられる。これは明らかに公平性の原則に反する。まづ、部下が理解すべきは、このようなやり方は間違つてゐることである。そして、勇氣がない者には現状を變えることができない。勝手に變つてゐるということは期待できない。

3.19 ダブルバインド

ダブルバインドとは、言語學や社會學、コミュニケーションの理論家であるグレゴリー・ベイト

⁸上司を先生や先輩・顧客、部下を生徒や後輩・業者に置き換えてもいいし、力関係のある友人(モドキ)同士、夫婦間でもさういうことはあるかもしれないが、ここでは上下を象徴する言葉である、上司と部下の組でいふ。

ソンが精神疾患とりわけ統合失調症を説明するために提唱した理論である。精密正確な説明はベイトソン著「精神の生態學」など原著にあたつてもらうしかないが、ここではほんの觸り、あるいは筆者の曲解だけを述べる。

例：指導教官が學生にかう云ふ。
 「ダレソレ先生のところでもどこでも自分の役に立つなら自由に聞きにいいいで」
 實際に、聞きに行かうとすると機嫌が悪くなる。

例：上司が部下にかう云ふ。
 「給料もらつてゐるんだから、自分で考へて行動しろ」
 で、實際に、自分で考へて行動すると…
 (笑)

いはゆる、「云つてゐることとやつてゐることが違う」状態である。人間は完全ではないから、云つてゐるやうには行動することはできない。だから單に行動ではなく、正確に云へば「云ふことで伝えるコミュニケーションと、それ以外のコミュニケーションが違ふ状態」である。端的には「云つてゐることと態度が正反對なコミュニケーション」のことである。「メッセージとメタメッセージとが正反對なコミュニケーション」である。もちろん、相手のほんたうに言ひたいこと(本當に云ひたいこととは何かがまた問題であるが)は、態度あるいはメタメッセージにある。

指導教官の例で云へば、強引に聞きに行つたら機嫌が悪くなつて居づらくなる。かといつて、聞きに行かなかつたら(研究が進まないで自分は困るが、それ以外に)、「オレの自由な學風を理解しない」と當の指導教官に批判される。表向きのメッセージ(言語的なメッセージ)と、態度といつた非言語的なメッセージとで乖離しているのである。

ダブルバインドのミソはどつちに轉んでも、云つた側が損(?)をすることはなく、逆に、解釋する側はどつちに解釋しても害を被るところにある。最初から、犠牲者の席に着席させられてゐるのである。相手を精神的に追いつめる際に、加害者としてダブルバインドを無意識に適用する人も多いだろう。ダブルバインドにひつかかると自分の無力感に絶望することになり、精神的に支配されるやうになる。

支配されるだけで終わりになるわけではない。かういふコミュニケーションばかり強制されると、被害者は精神的に追いつめられ、次の3パターンのどれかの困つた状態に落ち込んでしまう。パターン1 コミュニケーションの言語外の意味に固執する。たとえ、メッセージが逐語的な意味しかなく

ても(言外の含みのない単純・卒直なメッセージでも裏読みをしてしまう)。パターン2メッセージの逐語的な内容にのみ固執する(云ったことしかわからない融通が効かない人間になる)。パターン3コミュニケーションそのものを拒絶する。パターン3は人に會わないようになる場合もあるし、人と話をする時に、やはりダブルバインドのメッセージや支離滅裂なメッセージを発信(つまり、どちらも理解に苦しむメッセージを発信)するようになる場合もある。

ダブルバインドのメッセージを受ける犠牲者は精神的に統一性(非學術的な用語として)を喪ふが、ダブルバインドのメッセージを発信するものはそもそも精神的に統一を喪つてゐる。彼自身からして、自分を欺いてゐるのである。その者は自分のダブルバインドに気がついてゐないか、気がついてゐないフリをしなければならない。なぜなら、自分のダブルバインドに気がついてゐながら、そのままにしつづけることは大きな矛盾である。自分がどうしたいのか統一されてゐないといふことである。矛盾があると知りながら、ダブルバインドを使いつづけるのは自己欺瞞がなければならない。何らかのウソで正当化するのである。あるいは、自分の能力を下げた矛盾に気がつかない愚かな人間にならなければやっていられない。丁度、暴走気味の原子炉で、警報ばかり鳴って運転に支障があるから、警報を切るようなものである。それは致命的である。彼の末路はあへて述べるまい。自己欺瞞でごまかしても同じである。いづれ、自分の能力を切り下げて眞實を見る能力を放棄するしかなくなる。自分がついたウソすら認識できなくなるわけだから病膏肓といへる。

ダブルバインドは力関係が上司と部下、教官と學生、親と子で大小があるから成り立つのであって、力関係が逆轉すればそもそもダブルバインドはなりたたない。云った側がどっちに轉んでも損をしないコミュニケーションというのは、力関係は反轉すれば、云った側はどっちに轉んでも損をするコミュニケーションになるからである。

対策：ダブルバインドから逃れる方法は調べた限りでは、逃げるしかないやうだ。筆者もそれ以上によい方法を思ひつかない。

なお、ダブルバインドに見えて、ダブルバインドではないこともある。上司のはうの例で説明する。自分で考へた結果、とんでもない行動をとつたので、上司が不機嫌になるという場合がある。これは「自分で考へること」に對して上司は腹を立ててゐるわけではないのでダブルバインドとは云へない。上司自身が自分が何に對して不機嫌なのか内省して、自分がなにをしたいのかを明確に把握してゐないとダブルバインドではないが、どっちにしてもコミュニケーション不全に陥る。

人口に上ることも多いので、誰が提唱者が知ることもなく使はれてゐることが多い。ダブルバインド理論はコミュニケーション不全理解のキーになる理論なので、各自が獨自在研鑽を深めることを願う。

3.20 沈黙による攻撃

例へば、黙つて怒りを表現する上司。

腹を立ててゐることは誰が見てもわかるが、聲に出すわけでもなく、具體的になにが氣にいらぬのか、まわりのものにはわからない。その人の沈黙はどんな悪口よりも、どんなとなり聲よりも苦痛に感じる……といった経験はないだらうか？

その怒りを秘めた(實際は秘めていない)沈黙の解釋は部下に全て任されてゐる。何が氣にいらぬか自分で説明しないで、相手に考えさせやうとしてゐる。事情を明らかにしないことで上司は主導権を握つてゐるのである。

「自分のしたことを振りかえつてみる。
それで何が悪かつたか自分で考えろ」

部下に考えさせるだけ考えさせておいて、氣にいらなかつたら reject。いふまでもないことだが、よかつたかわるかつたかを決めるのは自分である。沈黙によつて何が悪かつたことを示唆されたからといって、悪く思はなくつていい。明示的に「それが悪い」と指摘されてから検討すればよいことだ。

これに對する防禦を考案する前に、まず分析しよう。この沈黙による攻撃の理由は

1. 主導権を握つてゐたい。
2. その上司はもし本心を表わしたら、あまりの激しさに相手はビビつてしまうだらうと考えてゐるかもしれない。
3. 逆に自分の弱さを恐れてゐるから、かもしれない。口論になつても正当性を主張できる自信がないのだ。惨めに負けるのなら黙つて威壓したほうがよい。

皮肉なことに、どの理由であつたとしても攻撃者は弱い人間であるという結論になる。第一の主導権を握つていたいと思うのは弱さであるし、第二の怒りのすぎまじさに相手がビビつてしまうというのは、たいそうな己惚れだ。實際は怒りは怒りでしかない。自分の怒りを過大評價することで自分の自信のなさを補ほうとしてゐるのだ。

結論として、黙つた怒りを表現する人物は怒りを正當な形で表明できない憐れな人物なのだ。友人や家族でないかぎり、かかわる必要はないが、

職業上やむえ得ず、かかわらざると得ない人もあるだらう。この種の攻撃は、怒りっぽいよりも質がわるい。うまく付きあっている対策はないが、沈黙した怒りに追従しないことが重要である。一つの方法は自分もしゃべるのをやめてしまうことだ。その場を離れる方が簡単かもしれない。無視するのも手である。「あなたのように黙ったまま不機嫌でいられても、なにもわかりません」と、いへるものなら云ってみたい、無視したくてもできない人もあるだらう。黙った立ち去るのが一番楽だが、自分の大切なものを護るためには、あえて云ふ必要がある。黙ってみたままでは自分の尊厳を護れない時がある。その時でも、その人物は憐れで愚かな人間であって、自分のほうが強いことを忘れないでほしい。

3.21 「そんなんではやっていけない」攻撃

例：あなたが自分の夢とか希望について語ってゐる、あるいは、あなたが自分の生活リズムやパターン、習慣について語ってゐる。
「そんなんではやっていけない」

これは、前に述べた「世の中はそんなものではない」攻撃や「そんなことは世間では通用しない」攻撃と同じパターンで、

- (1) 聞きながす。
- (2) そうですか。
- (3) thank you for your suggestion.

で、かわすのも一つの方法(この方法は弱い攻撃には万能)だが、違ったアプローチもある。

「やっていけないかどうかは、今の話題とは別の問題です。話をそらさないで下さい。」

あなたは相手に、自分の夢が実現可能かどうか批判してくれ、と頼んだのか。頼んでいないのに、こっぴどく批判するのは餘計なお世話だ。さらに強い方法もある。

「やっていけるか、いけないかの意見をあなたに求めてをりません」
「その話題については議論しません」
「なにをするか、なにをしないのかを決めるのは私です。やっていけるか、いけないかを判断するのは社会です。あなたではありません」

最後に相手の背景を分析してみる。ひょっとして相手は夢を断念した負い目があるのかもしれない。夢を捨てた人は執拗に批判的になる。そうでなくても人の夢に水をかけたり、ことさらに人を否定するのは強い人間のすることではない。だから、相手のことを強いと勘違いするのはやめなさい。

3.22 命令・依頼のトリック

命令文は3つのパターンがある。1つは願望、2つ目は達成の命令、3つ目は過程の命令である(仁田義男⁹)。この3つは混同され得るものであり、また、聞く方を混乱させる意図でもって敢て紛らわしい使い方をする人もあるので注意が必要である。次に、内容を簡単に説明する。願望とは「雨、雨降れ降れ、もっと降れ」の文のやうに、命令文の対象者(この場合は、雨)が自分の意思で命令を遂行実現することができない場合である。相手が相手の意思でさうならないのだから、命令は単に命令した人の願望を表明するに過ぎない。2つ目の達成の命令は「あっちに行け」のやうに、対象者がやる気になれば命令を実現できるものである。つまり、命令文は命令した内容の達成を命令してゐるわけである。3つ目の過程の命令とは「元氣になれ」「落ち着け」「くよくよするな」のやうに、対象者の意思ではどうにもならない命令である。「元氣にならう」と心に決めたからといって元氣になるわけではないし、「落ち着け」と云はれて落ち着くのであれば誰も苦勞はしない。このような命令は自分の意思のともに実行・達成できるものではなく、命令が示す状況の達成に向けての過程の段階を遂行することである。「落ち着け」は言いかへると「落ち着くように努めよ」である。

日常生活ではこの三者、特に達成の命令と過程の命令はしばしば混同されてゐる。

執權「千早城¹⁰を攻めよ」
執權「千早城を落とせ(制壓せよ)」

日常生活では有り得ない例文を出したがご寛容ねがいたい。「攻めよ」は、やる気になれば攻め得る。効果的かどうかは別として竹槍突撃でもバンザイ突撃でも命令を実行することは可能である。だから、これは達成の命令である。一方の「落とせ」は、相手のあることだし、命令を達成できるかどうかは状況次第であり、受令者は「千早城を

⁹「辭書には書かれていない言葉の話」岩波書店。術語は仁田による

¹⁰河内國金剛山にある山城で鎌倉時代末期、楠正成がたて籠った。この城を落せなかったのがキッカケで鎌倉幕府は滅亡した。

落すべく、攻める」ことしかできない。つまり制圧は努力目標であり過程の命令である。前者は、攻めなければ命令違反であるが、攻めた結果敗退しても命令違反にはならない。一方、後者は「千早城を落すべく、攻め」たが、落とせなかった場合には命令違反なのか微妙である。過程の命令であるならば、「がむばったんだから、それでいいでせう」といふことで命令違反にはならないが、これを達成の命令と考えれば、落とせなかったといふ結果は命令違反である。

では、次の例を見ていこう。

部長「會議で決まった販促プログラムを來月実施せよ」
部長「來月の販賣量を先月の2割増しにせよ」

前者は決まったプログラムだから、やる気になれば実施することはできる。したがって達成の命令である。後者はやる気になっても達成できないかもしれないので過程の命令である。普通は、部長の威勢のよい努力目標だと解するだらう。しかし、命令した部長はこの區別をしてゐないかもしれない。こうして見ると、「千早城」とあまり違はない。

「會議で決まった販促プログラムを來月実施せよ」と云はれて、その通りにしなかったことを命令違反だと非難されるのは仕方ないかもしれない。しかし、「來月の販賣量を先月の2割増しにせよ」と云はれて、その通りにならなかったからといって命令違反だと非難されては、たまったものではない。であるから、自分が命令された場合や人から依頼を受けた場合は、どこまでしてほしいのか達成か、過程でもいいのか、よくよく確認しなければならない。また、自分が相手に依頼や命令する時にも、この命令は達成か過程かはっきりと相手と合意しなければいけない。

たとえば、「營業成績を倍増させよ」と上司に云はれて「營業成績を倍増させるように努めます」と返事すると「ヤル氣がない」と批判されることがある。批判してゐる人は言葉のトリックにひっかかってゐるだけで、言明に瑕疵があるわけではない。むしろ正確な言葉遣いである。無意味で威勢がいいだけの言葉を述べておけば、その人たちは納得するのかもしれないが、あまり氣持のよいものではない。また、言葉のトリックで自縄自縛された環境には長くゐないほうがいいかもしれない。さういふ環境に長くゐると、その構成員同様、自分も自己欺瞞體質になってしまうから。

逆に、達成の命令なのに勝手に過程の命令に誤讀して「會議で決まった販促プログラムを來月實施する努力はした」といふ言い譯の餘地もある。眞面目に實施しようとしたが自分の意思とは關係

ないところでできなかった場合もあるかもしれない。この場合は、達成の命令だと思つてみたがフタを開けたら過程の命令だったといふことになる。達成と過程は端成分であるが、どちらつかずも多くある。であるから、命令・依頼に齟齬が生じないように、發令者も受令者も注意して過程を追う必要がある。達成が不可能になった命令は撤回するなり、過程の命令に格下げするなり、いっそ、單なる願望の表明にまで取りさげると調整が必要である。

最初の願望もクセもので、相手に意思がない状況、發令者の意思では達成できない状況は願望であるが、ある命令文が達成の命令か過程の命令か單なる願望かは連続的に推移する。そのため、この三者にはグレーゾーンが存在する。野球の試合で觀客が「打て！ 打て！ 江夏」と叫ぶのは願望であるが、監督が「江夏、打て！」といふのは過程の命令かもしれない。命令權がなければ願望だと解釋することは可能であるが、命令權自身が命令文を命令と解釋させる權限のやうなものだから、循環論法になる。江夏氏の親御さんが「ここでバントしろ」といふのは命令だろうか？ 命令か願望かは親御さんとご本人との關係によるし、社會が儒教文化か個人主義文化かなど社會制度・文化にも依存する。ご本人が命令と思つても相手は願望のつもりだったかもしれない。

食堂で隣りあわせた部長が一言、「水が飲みたい」

これは願望か命令か？ 部長との關係にもよるが大方の社會人としては、願望と解して好意で水をもって來てやるか、命令と解して命令を實行するか、聞き流す、または聞こえないフリをするか、になるだろうが、そもそも、この部長のように、命令權がありさうな人は願望か命令か無自覺に言葉を發すべきではない。聞いた人が混亂する。混亂した場合は、些細な件では大人らしく聞き流すか、重要な件では確認を取る必要がある。歐米のタテ社會系ドラマ・映畫ではしばしば「それは命令ですか？」「これは命令だ」というセリフがある。日本ではむつかしいかもしれないが、あえて相手に言質をとらせる意味で訊いてみたほうがいいかもしれない。さもないと、後で「あれば部下が勝手にやった」「さういふことを云つたかもしれないが、それは單に願望の表明で命令ではない」などと逃げられるかもしれない。

補足：日本語とは言いかげんなものだがつかりするのは早計である。どの言語も多かれ少なかれ曖昧なところをもつてゐるし、曖昧さ故に文脈や類推に支えられて效率的に運用できる状況のほうが多い¹¹。たとえば命令のレベルを状況にあは

¹¹G. レイコフ・M. ジョンソン「レトリックこそ人生」大

せて格下げすることは命令文が曖昧だからこそできることである。言語の要は如何に効率的つまり我々の意圖に沿って、納得できる格好で運用できるかである。

3.23 最低条件を最高条件にすり替える詐術、あるいはその逆

例：

相談者「母親はずばらで、私が子供のときに全然、子育てらしいことをしてくれなかったことがない... (お風呂で身体を洗ってもらったこともない。看病もしてくれない。出産の時も病院に来てくれない等々具体例を述べる)... 母は年老いて私を頼るが、私には怨みがある。そんな自分が嫌いだ」

回答者「あなたは、母親はいついかなる時も慈愛に満ちて完璧な子育てができるはずだという神話に取り付かれてゐるのではないか。母親も完全ではない、一人の人間。長所も短所もあり、子供の愛し方もそれぞれ異なっている。母親だって頑張っているつもりでも、子供を傷つけてゐることもあるだろう。あなたの理想は脇において、産み育ててくれた人を受け入れる努力をしてみるべきだ」

これはある日、新聞で見掛けたものを改変したもので、別に登場人物は母親でなくともよい。「父親らしいことをしてもらったことがない」でもいいし、他の人間関係にも当て嵌るだらう。重要な点は、相談者が母親に最低限の母親らしさを求めているのに對して、回答者は母親に理想像を求めてはならないと回答しているところだ。これでは相談者が母親に理想像を求めているように論點がすり換はってしまっている。なにかを抗議する時にこちらが最低条件を求めているのに最高条件を求めているかのやうなすりかえは起り得る。いつの間にか、こちらがとても尊大な要求をしているように話が換はってしまうのだ。しかも、その時に二者 擇一しかないような雰囲気になることがある。さういふ風になってしまったら、こちらは要求を引込めざるを得ない。

対策：まづは論點のすり替えに気がつくことである。たいていの場合は直感的になにか話が違ふといふことに気がつくだらう。問題は、どこが違ふかを明示的に説明できるかどうかだ。そのためには自分の条件に焦點を絞ること。自分の焦點が

ブレてはいけない。そんなことをしてゐると「私は何を主張してゐただけ？」ということになる。

實際問題として、すりかえをやってしまう人間に理解させるのはむづかしいし、もし理解させることに成功したとしても、自分が望んでゐたカテゴリーの回答は得られる可能性は少ない。上の例では回答者に理解させることはむづかしいし、「自分が嫌いだ」という訴へに對して、相談者にとって有効な回答は期待できない。この場合、回答者は單に回答者であつて、回答をする以上のことは必要ないし相談者も求める権利もないが、これが交渉事であつたなら (たとえば回答者が相談者の母親であつた場合)、相手はまづ理解しないし、理解したとしても容易には、相談者の要求を受けいれない (心をいれかえて謝罪したり、母親らしいことはしない)。人間は自分が望まない限り説得されない。それは回答者も相談者も同じ。だから、相談者としては自分の条件に焦點をあはせつつも、相手……すりかえをするやうな相手なら……に理解を求めるのではなく、機械的に達成可能な条件を求めるべきだ。

3.24 いくつも理由を疊みかける攻撃

いくつも理由をたたみかけて、理由の多さで強制しようとする攻撃がある。理由が多いと攻撃力が増すと思う人もゐるかもしれない。たしかに理由の多さによって「議論の厚さ」や「論證の厚さ」が増すこともしばしばある。しかし、理由が多ければ攻撃力が増すと考えるのは早計である。

もっとも簡単な場合は、理由同士が對立してゐる場合である。

例：ある収賄事件の容疑者英。相手の某との収賄現場となつた會合について
 A 英「當日、私は自宅にゐた」
 B 英「會合には某氏は來てゐなかつた」
 1 英「私は某氏とは面識がない」
 2 英「私が受けとつたのはカステラであつて、金銭ではない」

自宅にゐたといつてゐる (A) のに會合の出席者の話をする (B) のは致命的である。あとから誰かに聞いたのかもしれないが、さうなら「來てゐなかつた」と聞いてゐる」とすべきで、斷定調で「來てゐなかつた」と言明するのはおかしい。どちらにしてもそれは當人が言明すべきことではない。1, 2 は微妙である。面識がない人から贈りものを受けとるっていうのは常識的にはおかしいが、収賄事件の容疑者になるやうな社會的地位のある

人には感覚として おかしくないことかもしれない(笑).

巧妙だが理由が対立してゐる場合もある。理由の些末な内容ではない。理由のもとになった背景思想が矛盾してゐる場合である。

例：

甲「この仕事は社會にとって重要であるから やらなくてははいけない」

乙「この仕事をすれば、會社で優遇するし、昇進もある」

丙「状況的に我々としても、やらざるを得ない」

この例では甲の論法が、云はば重要性を語つてゐる(ここでは本質論と命名する)のに對し、乙は利益で釣る論法である。甲にしたがへば、會社で冷遇されようと左遷されやうとその仕事はやらなくてははいけない。乙にしたがへば、重要であらうとなかろうと自分に得にならないことはやつてはいけない。丙 [状況的にみて...] にゐたつては最悪である。誰もが状況から自由になれないのは當然のことだ。それを殊さらに言明することで、自分(丙)は無力だ、状況の奴隷だと告白してゐるに過ぎない。だからといって、あなたまで無力である必要はないのだ。

甲乙丙を違う人が述べるのならいい。同じ人物が甲乙という背景の思想が相容れない2種類の論法をつかうことは問題がある。人は己れの思想(個性)に基いて行動するとするなら、背景思想(性格)の異なる論法を使うことは、すくなくともその思想を表明してゐるのではない。簡単にいうとウソをついてゐる。おそらく、発言者はどちらの言明も正しいとは思っていない。單に「なにがなんでもやらせたい」ということが透けてみえる。ちなみに丙は甲乙どちらとも相容れない。

對策：これまで述べたやうに理由が本質的に違うのなら、その人はウソをついてゐる。個人的にはウソつきと付き合つても得るものはないと思つてゐる。讀者諸氏にもそのように勧めるものであるが、人間關係、選らべない場合がある(むしろ、その方が多いかもしれない)。この場合にやうに相手は何かを説得しようとしてゐるならば相手の矛盾を問い返すことも一つの方法だ。もし聴衆があるなら聴衆に矛盾を訴へる方が本人に問い返すよりも効果的に防衛できるだらう。ただ、實際問題は、この矛盾は「この人は近付くべきではない」というサインにしかならないことが多い。

3.25 「みんな…」攻撃

例：

甲「みんな、お前がおかしいといつてゐ

る。XXさん(權威ある人)も、お前がおかしいといつてゐた」

相手がハッキリで云つてゐることに……むつかしいかもしれないが……氣がつかなければいけない。もちろんハッキリでない場合もある。しかし、さういふ時は概して相手は冷靜である。相手が追い詰められた時に云ふ場合は

乙「さうですか。どなたが私をおかしいといつたのですか？」

甲「だから、みんなです。XXさんも」

乙「XXさんが、私をおかしいとおっしゃつたのですか？」

甲「いいました」

乙「それでは、XXさんに眞意を問ひ質しに行きましょう。XXさんは、私をおかしいとおっしゃつたのですね？」

甲「...でも、みんな、おかしいといつてます」

乙「みんなって誰ですか？」

甲「YYさんも、ZZさんも...」

乙「YYさんやZZさんが、私をおかしいとおっしゃつたのですか？」

甲「おかしいというか」

乙「YYさんやZZさんが、私をおかしいとおっしゃつたのですか？」

甲「...」

乙「誰が私をおかしいとおっしゃつたのですか？」

とにかく、この確認作業を繰り返す。結局、おかしいと云つてゐるのは當人だ。意見を主張する自信がないから、權威づけようとする、誰かが云つたことにする。ここで主張の要點を絞つて話を逸らさないことが重要。さうしてゐれば相手の言動にまどわされなくなる。非道い罵聲を浴せられることもあるかもしれない。それでも、あなたが見据ゑるところは、相手の發言の確認作業である。人間はハッキリを通すことができないやうになってゐる。だから最後まで言い切ることはできない。

それに、3人がおかしいといつてゐたとしても、3人はみんなとは云はない。

3.26 「はぐらかし」‘論法’

これは、實際には論法の名には値しない。かといつて攻撃でもない。なお、ここでは私は立論として見るべきものがあるものを論法とよび、立論として妥當ではないが相手を攻撃する言葉の使い方を攻撃と呼んでゐる。これは積極的に攻撃する

ものではないので攻撃と呼ぶには不適當であるが、論法と呼ぶには釋拙なので、「論法」とした。

「はぐらかし」……あへて説明するまでもないが、説明しよう。ある人が答へたくない質問をされた。その質問には回答しなければいけない。そこで、回答と稱して、質問の内容とはほとんど関係のない事柄を、だらだらと答へる。もちろん、それは質問者の訊きたかったことではないから、再度、質問者はより強い調子あるいはより明確な言葉で質問する。回答しなければいけないが、答へたくないものは答へたくないから今度は、先程の回答よりも若干、質問の内容と関係がありそうな、それでも実際はなんのメリットもない情報を長々を説明するのである。これが「はぐらかし」である。そのうちに質問してゐた人も疲れて、もういいや、となってしまう。あるいは回答の中の些末なネタに誰かが飛びついて議論が他のところに行ってしまう。

分析：「はぐらかし」と知って「はぐらかし」てゐる人もいれば、知らずに「はぐらかし」てゐる人もゐる。知ってゐようとゐまいと、「はぐらかし」をする人に共通するのは勇氣のなさである。事實を直視する勇氣のなさである。答へたくないなら「答へたくない」と云へばよい。それすらできないのだから相當重症だらう。基本的に「はぐらかし」をする話者は對話をすることを拒否してゐるか、拒否してゐるとは明言しない。そこにもどかしさがある。

「はぐらかし」をする原因は勇氣のなさ以外にもあるかもしれない。「はぐらかし」によってなにかその人に利益があるのではないか？「はぐらかす」ことはその人にとっては十分妥當な行動なのではないか？だとしたら、それは何か？と考へてみることも必要である。この場合、相手の氣持ちになって利益を計上することが重要だ。というのはそれが本當に利益なのかはあやしいからだ。たとへば、「はぐらかし」て答へないことによつて短期的には、回答しないで済むというメリットがあるかもしれないが、長期的に見て相手に愛想をつかさされるというデメリットがあるかもしれない。少なくとも、誠實でない對應をすれば誠實でないという評判はついて當然だらう。合理的に考へれば、全然妥當ではない行動だが、相手にとっては妥當なのだらう。つまり、わざわざ「はぐらかす」ためには相手なりの價值觀（あるいは無自覺）があると思考へるべきで、相手の氣持ちを推し測ることが必要である。

對策1：勇氣のない人、對話する氣のない人と付き合つていてもなにも得るものはない。付きあはなくして済むなら、G.M.Weinbergのいふやうにその人の部屋から笑つてドアを閉めて立ち去るがよい。さうでないなら...

なにか有益なことを答へてもらはうという期待は捨てること。次に、相手に要求することを本當に機械的にできることだけに限つて質問すること。

對策2 諦められない場合：「はぐらかす」ことによつて相手が得る利益はなにか？もちろんケースによつて異なるが、その利益が無効になるまで「はぐらかし」つづけるだらう。たとえば、「はぐらかす」ことによつて質問に回答せずに済む、という利益があるとする。質問しても「はぐらか」されるので疲れる、そして諦めるわけである。諦めたところで「はぐらかした」側が特に大きな損をしない限り、「はぐらかし」をやめるインセンティブにはならない。ただ、ひたすら面倒くさいが「はぐらかし」ておけばいいわけだ。彼は「はぐらかす」ことで、その場を逃げおおさうとしてゐるだけだ。それは勇氣がないせいもあるが、この場合は戦略として取り扱つた方がよい。つまり、こちらは「はぐらかし」戦略自體を攻撃しなければならない。

對策2-1：相手が「はぐらかし」を重ねてとにかくこちらが疲れるのを待つてゐる戦略に出た場合、こちらはそれを見抜いて、持久戦の用意をする必要があるかもしれない。押し問答を延々を續けて、逆に相手が「はぐらかし」に疲れるように誘導する戦略である。相手が先に折れる可能性もあるが、こちらが先に根負けするかもしれない。どちらにしてもかなり時間をとられるので覺悟が必要。そして「はぐらかし」につきあう場合は、怒ったりイライラすることは不要。そんなことで心を消耗すべきではない。そうでなくても、時間も神経も消耗する對策は下の下の對策であつて最後の手段としておくべきだらう。（が、對策として保有してゐることが重要。）

對策2-2：相手が「はぐらかし」を重ねることがデメリットになると相手が理解すればよい。と、いふはやさしいが行ふは難し。ケースバイケースなので、共通することだけ述べる。相手への對策は結局、對策1と同じになるが、たいしたことはなんにもできない。これをちゃんと自覺することが大事。いつても無駄な相手にあれこれ云ふのは、クルマがパンクしてゐるのにエンジンを分解するのに等しい。對策は、したがつて相手へ訴へかけるのではなく、相手以外の者や事に訴へかけるべきだ。そのためには相手がなんのために「はぐらかし」てゐるか、「はぐらかさ」ないとどんなデメリットあるかを理解することが重要である。多くの場合、それはパワーの流れである。

3.27 「聞きながし」‘論法’

「はぐらかし」と同様で問題に眞摯にとりくまないことで、問題を回避する論法である。これが

効を奏することもあり、我々も暴言や攻撃的文言は聞きながすことで対応しているので、これが常に悪いといふわけではない。ただ、こちらが眞摯に訴へてみえるのに「聞きながさ」れたら、つらいだろう。その場合の対処法をここで考察する。重要なことは、

相手が自分の発言をどれくらい気にするかは正確に推し測るべきである。

たとへば、「今後、こういうことがあったら、協力しない」と言ったところで、ハイハイと聞きながすことも相手にはできるかもしれない。相手がそれを眞摯に聞く理由がない場合はさうだろう。「協力しない」といったところで、彼らには協力するしかないのだと足許を見られたなら、聞きながせる。あるいは、今ことさらに言っているだけで長くは續かないと見做されても、聞きながし得る。

自分の問題でないと思っただけなのに、どうしてそれを問題だと考えることができるだろう。人間は自分が問題と思ふことしか、問題にしない。

聞きながす事例、あるいは聞きながしていたが問題になったので聞きながせなくなった事例については、日本が隣接國に意見を言って聞きながされている事例や熟年離婚に至る夫婦の例など、現代社會にいくつもあるが、ここでは由井小雪の亂をとりあげる。

徳川時代初期、家光のころまでは、幕府が諸大名の力を削ぐために大々的に大名いぢめをした。そのため、取り潰しにあった大名に奉職してゐた武士が浪人となった。浪人は江戸に流入し治安が悪くなった。市井の人はこれに危機感を抱いた。市井の人ばかりではなく幕府要職にある者も提言したが、幕府は無視した。あげくは浪人救済事業を起こさうとした要職のものもあつたが、幕府はこれを亂心として排除した。諸藩には浪人の再就職を厳しく制限した。市井の軍學者、由井小雪¹²は幕府の大名いぢめ政策を批判していたが、それだけでなく、家光死去と共に幕府轉覆の行動を起こした。これは事前に發覺し、討ちとられたが、幕府はこの事件を契機をして、大名いぢめ政策を變更し、浪人の再就職事業にも着手した。

つまり、幕府は自分の身に危険がおよぶまでは(自分の問題になるまでは)、問題を問題をしなかつたのである。特に、幕府は武力しか信じてゐないから、口で言っても聞かない。武力しか信じてゐない者は最悪である。殴られなければわからないからである。殴られるまでわからない、というこ

¹²彼は、鎌倉幕府と互格にやりあい、ゲリラ戦のプロである楠正成の軍學を繼承してゐた。彼の行動は確かに楠流である。

とを最悪を思ふなら、口で言われてわからなければいけない。つまり、他者のいふことに眞摯に耳を傾けなければいけない。

重要なのは、

相手が、こちらの主張を聞きながすのなら、それを相手の問題にしななければいけない。

3.28 「ほめごろし」攻撃

これはまともに反論しても勝ち目のない相手に對して、逆に相手を褒めて、褒めて褒めちぎる攻撃である。心底、心服などしていないところに注意しなければいけない。

對策：効果的な對策はない。無視する以外にないがそれ自體は實害もない。上で少し述べたが、ある人が好む論法とその人の性格とはかなり密接な關係があると考へられてゐる。たとへていへば法醫學では、卑怯者は絞殺や刺殺を好まず、毒殺を好むといふ。「ほめごろし」をする人はおそらく正面きって攻撃することはないだろう。だから正面ではない攻撃に注意しなければいけない。

4 外部機關の支援を頼る

*** ほんたうはこの章を最初にもって來るべきかもしれない。まだ未成のため、後半に位置させた。

最初に私は忠告したい、「外部機關に頼ったほうがいいのかも」とちょっとでも思つた時は、頼るべき時であると。

助けを求めることは強さのあわれみであつて、弱さのあわれみではない。
(G.M. Weinberg)

外部機關に頼りたがらない人もゐる。自立心の強い人ほど、外部機關には頼りたくないだろう。確かになんでもないやうなことで人に頼るのは迷惑なことだし、人は自分のことは自分でしたいとふ自立心がある。自立心はよいことだし、尊重されなければならない。しかし、執拗なまでに外部機關に頼ることを拒否するとふのは、一人で抱え込んで身動きがとれなくなつてゐるに過ぎないことがある。自分が正當な自立心から自分で解決しようとしてゐるのか、それとも一人で抱え込んでゐるだけなのか、よく見極める必要がある¹³

¹³そもそも自分の性格が、一人で抱え込む傾向が強いかどうかをよく知つて、それとの對比で見極めるべきであるが、強く悩むのはたいていの場合、一人で抱え込む傾向が強い人に多いので、悩んでゐるとすれば多分、一人で抱え込んでゐるだろう。

一人で抱え込む傾向が強からうと弱からうと、正しい命題がある。「外部機関に頼っては絶対にいけない」と、もし思ふのであるならば、それは既に心の平和と尊厳が損なはれた状態のしるし¹⁴であるから、外部機関に頼ることを眞剣に検討したほうがよい。得心できなければ、かう考へてみるとよい、「外部機関に頼っては絶対にいけない」理由はなにか？ それを合理的ないしは論理的に説明してみるのだ¹⁵。かならず行きづまる。外部機関の介入を拒むものは、守っても仕方のない體面だったり¹⁶、人に頼ってははいけないとふ、よく考へると實體のない思い込み・刷り込み¹⁷だったり、自分が生きてみて愛情を感じられないが故に他人を拒絶したり(がっかりするのはもうたくさんだ。誰も信用できないから私は一人で生きて行かなければならない等)、不自由あるいは傷つた心である。心が自由な状態であれば「私はいつでも必要な時に他者の助けを頼ることができる¹⁸」わけで、小泉純一郎氏ではないが「いつが適切かは適切に自分で判断する」のである。

コジれてどうしやうもなくなってから外部機関の支援をすがる場合も多い。支援者相談者は「もうちょっと早めについてくれたら、もっと仕様があったのに…」と思ふこともあるだらう。でも、これはよいほうで、コジれてどうしやうもなくなっても物理的實體がある場合はやりなおせる。物理的實體は損なはれてしまったら、とりかへしがつかない。であるから、いつの段階でも外部機関の支援にすがっていい。こんなんで…などと謙遜(?)する必要はない。頼るべき時ではない場合は外部機関のほうで認定してくれる。

次に外部機関とのつきあい方を述べる。

外部機関にもいくつかの段階がある。難攻不落の城が幾重にも堀と壘と柵で守られてゐるやうに、あなたを守ってくれる外部機関にもいくつかの段階がある¹⁹。最初の外部機関は両親や友人である。これはむしろ機関といふべきではない。心

を通じあはせる相手を機関を呼ぶのは心理的に抵抗があるだらう。ただ、なんとも参考にならない肉親しかもてない人もゐる。己の未解決の問題を子供に押し付けてゐるとしか思へない親もゐる(もちろん、そんな親でも親の恩はあらうが)。結婚相手は撰べるが親は撰べない。友人をつくることは自由に可能であるが、傷ついた人はなかなか友人をつくりにくいことがある。平素からお互い支えあふ関係を築いておくのが重要なのはいふべきにもあらずだが、今さら云つても仕方のないこともあるだらう。ここではこれらを割愛し、制度的なもの・より機関らしい機関をとりあげる。第○段階はもちろん当事者間で解決だが、そんなことができるならこの文を読まずにてゐられるので割愛する。

第一段階は、職場の上長に訴へることである。高壓的な上長の場合(それ自體が問題の種だが)、ちぢこまって云へないこともあるだらう。それでも1回は聲を大にして、嫌なものは嫌だと主張する必要がある。もし、聲にしても理解されなければ諦めて次の段階に移るとよい。二度殴られる必要はない。また、よい上司は統計的に少ない。

第二の段階は、コミュニティ内の問題解決機関である(職場では、セクハラ相談室とかカウンセリングがこれに相当する。NPOや市民組織、医療やカウンセラーもこれにあたる)。たいていは、専門の知識と訓練を受けた人が應對する。彼らはあなたの代わりに問題を解決してくれないだらうが、あなたの問題を整理してくれ、あなたが問題を解決する力になってくれるだらう。そもそも問題を他の人に知ってもらうのはなにより重要であり、理解されるのはありがたい。また、同様の事例をもとに経験知をもとにした對處法を指導される。

ただし、これにも問題がある²⁰。擔當者が能力も経験もないのに獨自の信念をもとに解決にのりだして、守秘義務のある相談内容を、よりによって紛争当事者に話したり(例、あなたの部下の某さんがこんなことを云っていたんだけど…),問題を餘計にこじらせる場合がある。もちろん、上の例は處罰の對象である。あなたは悪くない。あなたは悪くないだらうが、そこにはみづらいかもしれない。しかし、この始末は相手にあるのだから、かわりの場所を相手に見付けてもらうように強く主張すべきだ。ほんたうは人を見る目が必要なのだが、人を見る目は経験しないと身につかない職人藝である。話して、センスが違うやう²¹だった

¹⁴少なくとも心の自由さが欠如してゐることに同意いただけよう。

¹⁵同様の思考に興味のある向きは、V.E. フランクル(『夜と霧』で有名)の logical therapy を参照されたい

¹⁶ご本人が眞剣にやってみるならば、體面がつぶれたくらいでは支援者は去らない。自尊心は本人が放棄しない限りなくなるらない。

¹⁷われわれはしばしば「人に迷惑をかけるな」と教育されるが、時々「他者に迷惑をかけずにはゐられないことを自覚し、他者の迷惑を受け容れ助けられる人になりなさい」といふべきではないかと感ずる。誰も人に迷惑をかけずには生きられない存在であるし、「人に迷惑をかけるな」は他者の助けを求める際の障壁になり、狭い自分に閉じ込める軛となる。そして「人に迷惑をかけてゐない」とふ思い込みは増上慢になる。

¹⁸もちろん相手には断る権利がある。

¹⁹このやうな思考法それ自體が防衛意識にもどづくもので、傷ついた人にありがちな思考法である。自由闊達な人はこのやうな意識すらない。

²⁰脅かすつもりはない。對應を述べたいだけ

²¹ひとつは無理解あるいは無神経。ふたつ目は一見共感してくれるのだが上滑りした概念や知識で知った氣になってゐるだけ。お説は重厚だが本人が考へたわけでもなく當然、身にもついてゐない。本人の考へをもたないから、あなたの考へを革新することもない。

ら、あるいは變にセンスが乗りすぎてゐる²²やうだったら、他をあたった方がよい。それは失敗でもなんでもない、實りのない作業からの解放である。

最後は法制度ならびに法制度に基づく機關である。警察ないし行政機關。擔當者が能力も経験もないのに個人で解決に乗りだしたり、とか、聞き流される、ということもあるかもしれないが、民主國家の機關は水平方向でも上下方向でも互いに相互監視的になってゐるので、1カ所でダメなら他をあたってみるとよい。また、關係するNPO(第二段階に含まれる)にあたってみることもよいだらう。

問題をおほやけにすることによって解決できる。少なくとも解決に近づける。他者にこそたよらめ。他者は期待するほど助けにはならないが、がっかりするほど無力ではない。そして他者はひとりではない。

5 終わりに、勝利なき戦いを捨てて、そして警告

最後に、勝利なき戦いを紹介して終章としたい。

大和國添上郡(そふのかみこほり)に瞻保(みやす)という男がゐた。孝徳天皇の時代に儒學生で、忠孝の道(儒教)を學んでいながら輕薄な理解で、實際には母を敬養しなかつた。ある日、母が瞻保の稻を借りたが、返済できなかつた。瞻保は怒って取り立て、母は土下座して許しを請うたが、瞻保は友人のゐるのも構わずに無視した。あまりのひどさに居合わせた友人たちが意見したが聞き容れなかつた。それで、友人たちはいたたまれなくなり代りに借金を返済した。

すると、母は乳房を出し泣きながら「お前を育てた時はいつも休むことがなかつた。他の子が親孝行してゐる時、お前もいつかさうしてゐると楽しみにしてゐたが、逆に侮辱されてゐる。私の期待は完全に間違つてゐた。お前は私が借りた稻の返済を迫つた。だったら、私もお前

²²詐欺師の特徴は2つある。一つは人の欲につけ込む。二つは飾る(ま、いつはらない詐欺師は定義違反だが)。第一について、この不幸な状況から抜け出したいと欲がある。人は欲があるからこそ人は前に進むわけだが、樂して解決したいと思うがまづい。困難に見える途のはうが解決が早いことがある。樂か困難かではなく、真か善か美かで判断すべきである。第二について、言葉で飾る場合もあるだらうし、安請合いといふ場合もある。欲に心を喪つてゐない限り第二は見分けやすい。

に飲ませた乳の代價を請求しよう『吾もまた乳の直(あたひ)を徴(はた)らむ』母と子の縁は今日で終わりだ。天も地も知つてゐる。うらめしいことだ。』

それを聞いた瞻保は無言のまま部屋から出撃(借金)の證文をもってきて焼き捨て、そのまま發狂して山野を彷徨した。三日後には家が突然燃えだし妻子ともども飢え死にした。「日本靈異記 上巻第廿三」(今昔物語集第廿卷卅一話にも轉載されてゐる)

なんともゐたたまれないが、示唆に富む話でもある。瞻保が背負つて立つ律令制度……より具體的には貨幣・學歷主義と母に代表される家族主義の對立と見ることができ²³。「乳の直を徴らむ」とは母がこれまでの家族主義を捨て貨幣・學歷主義の論理で瞻保に反撃したことに他ならない。そして、瞻保の發狂は貨幣・學歷主義といつても結局、家族主義に寄生してゐるにすぎないことを母に指摘されたためかもしれない。今日、でかい顔をしてゐるものの多くは律令制度の瞻保と同様に、もっと根源的・土臺的な何かに寄生してゐながら宿主を侮辱してゐる。さういふ意味ではこの話は今日的な意味をもつ。

そういった社會科學的な考察はひとまず置いて、本稿のテーマである心の平和の觀點から考察する。なぜ、瞻保は「乳の直を徴らむ」といはれたくらいで發狂したのだらうか。信じられないかもしれないが、いかに冷酷な人間といへども(正確には、冷酷な人間ほど)、一言をいはただけで發狂してしまうだけの致命的な弱點をもつてゐる。瞻保は自分が家族主義、具體的には母によつて生かされてゐることを意識的あるいは暗黙のうちに知つてゐた。「乳の直を徴らむ」という言葉は、瞻保の考へ方(貨幣主義)を根本的に詰めていく/自分に適用すると破綻することを突きつける。瞻保は母に乳の代を請求されて、「そこまではるかー?」と思つたかもしれないが、その瞬間知る「そこまでは」てゐるのは自分のほうだと。あるいはもっと單純に、自分が子供の時は母に無償で乳をもらうくらいの人間的な存在であつたが、

²³奈良時代(正確には天平)の貨幣については榮原永遠男氏の研究がくはしい。たとえば「古代日本人と錢貨」(中央公論社 日本古代別巻)によると錢といつても通貨としての價値は民衆や豪族にはほとんど信じられず、どちらからといふと呪術的な道具として蒐集されたりした(蓄錢禁止令を参照)。瞻保のやうな「現代的」價値觀をした者はめづらしかつたであらう。一方で、中世には貨幣經濟はすっかり定着してをり、それ以前にも萌芽はあつた可能性がある(網野善彦氏)。なお、瞻保の例は貨幣ではなく出撃の稻と嚴密には違ふ。ただし、日本靈異記の他の逸話には出撃の借金で首が回らなくなつた人の話が頻出し社會史としては一連のものとして考へてゐる。個人的には面白いが割愛する。

て、リコーバーはほんとうに期日より安全を重視しているのだ、という極めて明確なメッセージが海軍と契約業者のすみずみまで傳へることができた。海軍にとっては迷惑だったかもしれないが、リコーバーにしてみれば、迷惑に思ふことこそバガげていた。「科学技術のルール」といふものは、まさにこのことだからだ。

口では安全が大事といいながら、実際は期日のほうが重要だという長の行動。

兵卒は常に士官を監視する。

世の中に不満があるなら自分を變へよ。

他人の信頼など期待していません。自分で信じてみますから。(シャーロックホームズ「這う人」
The Adventure of the Creeping Man)

参考文献

ロバート=E.=アルベルティ・マイケル=L.=エモンズ・菅沼憲治(訳)・ハーシャル(訳) ミラー(1994)『自己主張(アサーティブネス)トレーニング—人に操られず人を操らず』, 東京図書, 321頁. ISBN: 4489004214, 原題: Your Perfect Right, Robert E. Alberti and Miller Herschel and Michael L. Emmons.

バルバラ=ベルクハン・瀬野文教(訳)(2000)『アタマにくる一言へのとっさの対応術』, 草思社. ISBN: 4794209800, 原題: Die Etwas Intelligenzere Art, Sich Gegen Dumme Sprüche Zu Wehren (Deutsche 1998) Barbara Berckhan Kösel-Verlag GmbH & Co., München.

バルバラ=ベルクハン・瀬野文教(訳)(2001)『嫌なものは嫌ときっぱり伝える対話術』, 草思社. ISBN: 4794210477, 原題: Die Etwas Gelassene Art, Sich Burchzusetzen (Deutsche 1995) Barbara Berckhan, Kösel-Verlag GmbH & Co., München.

バルバラ=ベルクハン・瀬野文教(訳)(2002)『グサリとくる一言をはね返す心の護身術』, 草思社. ISBN: 4794211325, 原題: So Bin Ich Unverwundbar (Deutsche 2000) Barbara Berckhan Barbara Berckhan Kösel-Verlag GmbH & Co., München.

ジェームズ=R=チャイルズ・高橋健次(訳)(2006)『最悪の事故が起こるまで人は何をしていたのか』, 草思社, 432頁. James R. Chiles, 2002, Inviting Disaster: Lessons from the Edge of Technology: An Inside Look at Catastrophes and Why They Happen.

クリスティン=デンテマロ・レイチェル=克蘭ツ・ニキリンコ(訳)(2000)『キレイなための上手な「怒り方」—怒りたいのに怒れない, 怒ると人を傷つけてしまうあなたに』, 花風社, 188頁. Christine Dentemaro and Rachel Kranz, 1995, Straight Talk about Anger.

アン=ディクソン・山本光子(訳)(1991)『アサーティブのすすめ』, 柘植書房新社, 256頁.

ハリエット=ブレイカー・吉田利子(2001)『思わずYESと言ってしまう自分』, 光文社, 323頁. ISBN: 4334961150, Harriet B. Braiker, 2001, The Disease to Please: Curing the People-Pleasing Syndrome.

片山交右(1995)『心の庭にバクを飼う方法—怒りとイライラを追放する心理学』, アニマ2001, 239頁. ISBN: 4795234809, アドラー心理学からのアプローチ.

スーザン=キャンベル・本田理恵(訳)(1998)『なぜ、今までのやり方を変えられないのか: 変化の時代に取り残されない6つのメタスキル』, 実務教育出版, 344頁. ISBN: 4788917467, Susan M. Campbell, 1995, From Chaos to Confidence, Survival Strategies For the New Workplace.

小澤竹俊(2004)『苦しみの中でも幸せは見つかる』, 扶桑社, 207頁. ISBN: 4594045286.

デューク=ロビンソン・甲賀美智子(訳)(1999)『人の目なんか気にしない—「いい人」が犯す9つの勘違い』, サンマーク出版. ISBN: 4763192620, 原題: Good Intentions—The nine unconscious mistakes of nice people, 1997, Duke Robinson.

ローラ=エプスタイン=ローゼン・ハビエル=F=アマドール・富田香里(訳)(1998)『あなたの「大切な人」がふさぎ込んだら』, 講談社, 348頁. 原題: When Someone You Love Is Depressed: How to Help Your Loved One Without Losing Yourself.

オロール=サブロー=セガン・白川美也子(訳)・山本知子(訳)(2006)『トラウマを乗り越えるためのセルフヘルプ・ガイド』, 河出書房新社, 253頁. Aurore Sabouraud-Séguin, 2001, Revivre Après Un Choc.

アルボムツレ=スマナサーラ(2006)『怒らないこと: 役立つ初期仏教法話1』, サンガ, 204頁. ISBN: 4901679201.

- ワインバーグ, G. M.・大野 徇郎 (訳) (1994)
『ワインバーグのシステム思考法：ソフトウェア文化を創る〈1〉』, 共立出版, 340 頁. ISBN: 432002706X, Gerald M. Weinberg, 1991, Quality Software Management: Systems Thinking.
- ワインバーグ, G. M.・大野 徇郎 (訳) (1996a)
『ワインバーグのシステム行動法：ソフトウェア文化を創る〈3〉』, 共立出版, 360 頁. ISBN: 4320027086, Gerald M. Weinberg, 1994, Quality Software Management: Congruent Action.
- ワインバーグ, G. M.・大野 徇郎 (訳) (1996b)
『ワインバーグのシステム洞察法：ソフトウェア文化を創る〈2〉』, 共立出版, 398 頁. ISBN: 4320027078, Gerald M. Weinberg, 1993, Quality Software Management: First-Order Measurement.
- ワインバーグ, G. M.・大野 徇郎 (訳) (2000)
『ワインバーグのシステム変革法：ソフトウェア文化を創る〈4〉』, 共立出版, 543 頁. ISBN: 4320029801, Gerald M. Weinberg, 1997, Quality Software Management: Anticipating Change.